

291

編一十三第

究研人

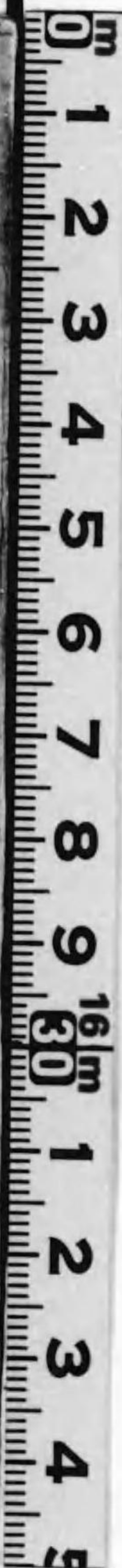
特228

657

弘法大師言行錄



版會行刊錄言行人偉



始

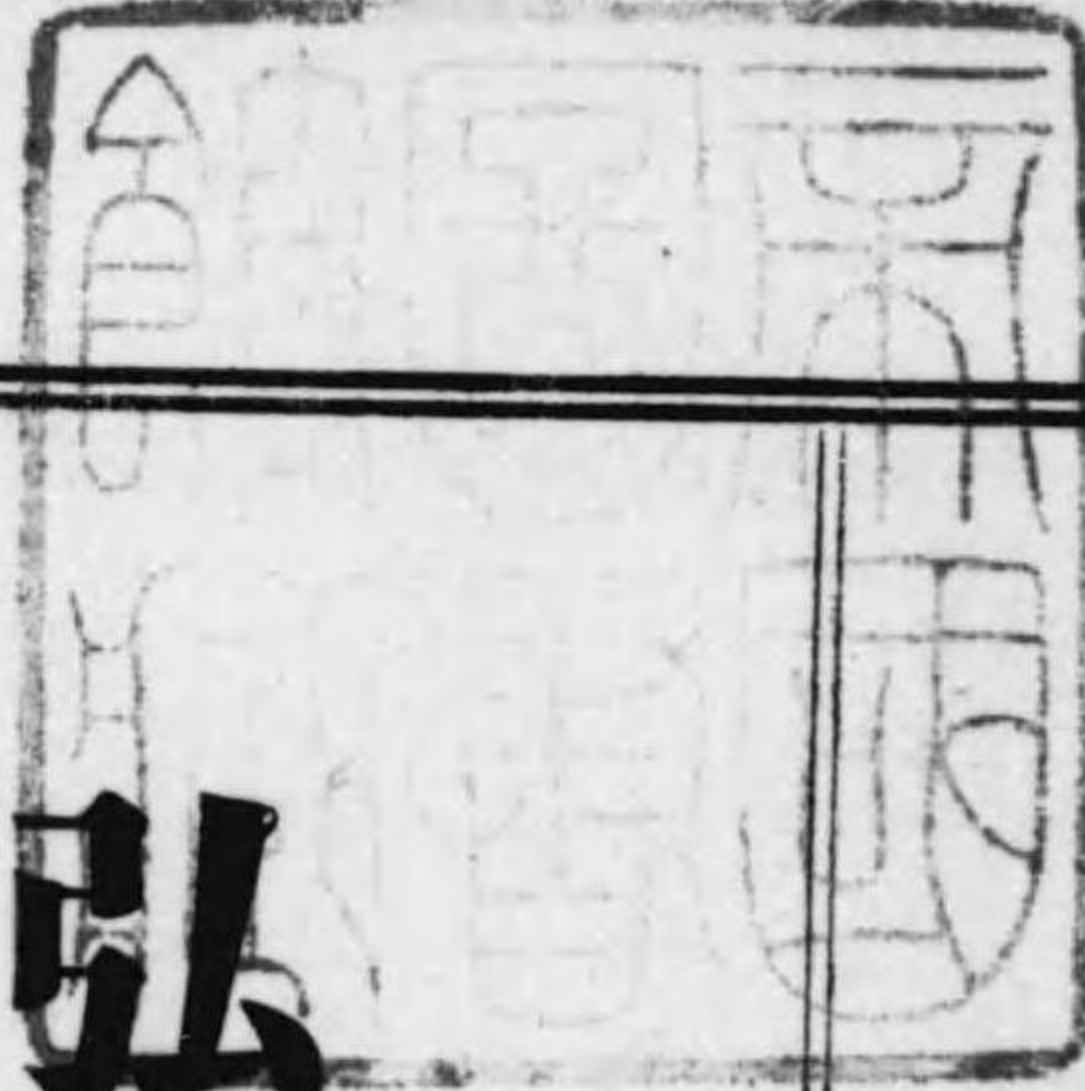


持 228  
657

# 弘法大師言行錄

大屋德城編著

偉人言行錄刊行會



弘法大師言行錄

弘法大師言行錄

目次

偉人と自然……………一  
屏風が浦の神童……………五  
家系と幼時……………一一  
少年時代……………一五  
京都に出て、大學に遊ぶ……………一八  
此の迷ひ、此の惑ひ……………二四  
三教指歸成る……………三〇  
龜毛先生論……………三六  
虛亡隱士論……………五〇

二

假名乞見論……………五八

南海の跋涉、近畿東海の歴遊……………八六

勳操の門に歸る……………九一

大日經の感得……………九七

入唐求法……………一〇三

慧果和尚に謁す……………一〇七

歸朝と密教弘通……………一二〇

平安佛教の偉觀……………一二五

金剛峰寺を創す……………一三二

東北巡錫と社會事業……………一四三

高野の入滅……………一五七

佛教精神の體現と大師の人格……………一六一



# 弘法大師言行録

## 偉人と自然

大屋徳城 著

偉人は青山白水の郷に生まるゝとは、從來多くの史家傳記家に依つて繰返された套語である。山水偉人を生むか。偉人偶多く名山大澤の畔より起るか。一概にはいへぬ。併しながら、觀よ。古來多くの高材は碧山の間から起つたてはないか。ルソーは自然を無上の師友としてエミールの生長を托し、近代の教育家の多くは個人に及ぼす自然の感化に眼を向くることを怠らぬ。

例へば、此に一莖の高山植物がある。彼は雪線以上の神園に、其の鮮妍

二  
たる花瓣を、残雪の間に、發き、數千萬載、人寰の汚れに、觸れぬ、天門の靈氣に、其の馥郁たる芳香を吐いてをる、可憐なる山蝶之に、戯れ、楚々たる松、鶏之に、隠れ、羅々たる朝露之を潤し、滴々たる清泉之を養ふ、此に於いて、か、天の愛見の如く、美の權化の如く、正に靈の國の面影を宿してをる、而も一たび之を平原に下したならば、どうであらう、忽ち俗塵に纏はれ、肥土に累せられて、其の鮮と研とを失つてしまふのである。

彼は一莖の花に過ぎぬ、而も環圍の氣象と土地の肥瘦とは、斯くの如き差を生ずるではないか、况んや、其の身體に於いて、其の精神に於いて、更に複雑なる人間に於いてをや、人間に對する自然の感化は、其の大なるを許さざるを得ぬ、此に於いてか、古來の史家亦徒に無稽の妄説を唱道するものでないことが分るであらう。

更に翻つて、歴史の頁を繰いてみれば、如何に多くの偉人が江山明媚

の氣に養はれてをるか、吾人は其の多きに驚かざるを得ぬ。

加○之○山○水○秀○麗○の○郷○は○詩○歌○神○話○の○故○園○で○あ○り○宗○教○藝○術○の○搖○籃○で○あ○る○  
ア○ル○プ○ス○の○峰○影○相○重○り○大○小○の○山○湖○碧○を○競○ふ○瑞○西○の○高○原○に○は○牧○草○澤○々○  
と○し○て○羊○影○相○望○ん○で○を○る○此○の○間○の○風○光○は○詩○人○シ○ル○レ○ル○の○筆○に○入○つ○て○  
ウ○キ○ル○ヘ○ル○ム○テ○ル○の○一○篇○長○へ○に○幽○美○を○恣○に○し○て○を○る○イ○ー○ジ○ア○ン○海○の○  
波○さ○ら○さ○ら○と○藻○の○花○を○誘○ひ○オ○リ○ン○ピヤ○の○月○光○夢○の○や○う○な○南○歐○の○地○に○  
は○優○妙○な○希○臘○神○話○が○編○ま○れ○た○か○の○海○を○踰○え○て○ト○リ○ト○ン○の○笛○の○音○を○き○  
か○ひ○と○歌○う○た○詩○人○の○叫○び○は○此○の○美○し○い○自○然○の○大○氣○に○觸○れ○た○心○の○緒○琴○  
の○韻○で○は○あ○る○ま○い○か○。

然り、自然が人の性情を變改し、氣質を醸成するに與つて力あることは何人も拒む能はざるところである、故に任意の偉人を拉し來つて、其の居地郷貫の山水に照してみれば、其の間に争ふべからざる反照があ

る吾人試に深更人静り、萬籟眠り深き時、偉人の傳記にあらはれた自然の姿を辿つたならば、いかに津々たる趣味が湧いて來るであらうか。况んや、一穗の青燈心裏を照し、彼等の面影が髣髴として眼前に格る時、吾人は此等の英靈底の好漢と共に、そが嗜戯し、跋渉し、隱棲し、幽居した山光水韻に接する思ひを禁ぜぬであらう。

人格を通してあらはれた自然美は、人格をして潤ひあらしめ、光あらしめてをる偉人の上に、響く山光水色は、偉人をして大ならしめ、廣からしめてをる譬へば、月夜の渺々たる一味寂靜の光の海に浮んでをる萬象のやうである。彼等が潤ひあるだけ、それだけ、憧憬景慕の心を起さしめずには置かね。

吾人は白蓮社を結んだ、慧遠の人格を思ふ毎に、廬山の美を忍ぶことを禁ぜぬ。摩訶止觀を開いて、智者大師の高風を慕ふ毎に、天台山の莊嚴

を仰がざるを得ぬ。其の他、道元禪師の永平に於ける、日蓮上人の身延に於ける、傳教大師の叡山に於ける、弘法大師の高野に於ける、吾人は其の遺文を繙き、其の傳記を讀む毎に、必ずや、山紫水明の氣、彼等の筆端を繞り、彼等の人格を包んでをることを思はざるを得ぬ。

嗚呼、山水は偉人を作り、偉人は山水を活かす。此の山と水とありて、彼の人格は愈高く、彼の人格ありて、此の山と水とは益靈である。天地秀麗の氣は凝って山水となり、人間俊雋の材は鍾って偉人を作る。是と彼と相對して、渾融同化、雪上に霜を加へて、皎更に皎、明月蘆花に沈んで、白更に白人をして、恍惚たらしめずんば、止まぬのである。

### 屏風が浦の神童

我が國の風光の美を擧ぐるものは、先づ指を富嶽と琵琶湖とに屈す

る固より富士は神氣秀麗にして遠く天半に白扇をかけ琵琶は碧波鷗  
を浮べて、周囲の名勝之を飾り、共に得易からざる名勝たるは論を俟た  
ぬ併しながら前者は唯一山の美に限り、後者は一湖の麗に限るので、山  
麓の風光湖畔の舊跡、廣いことは廣いが、之をかゝる瀬戸内海の明媚に比  
すれば、其の廣さ其の大きさに於いて、確に一步を譲らねばならぬ。

瀬戸内海の風光たるや、何等取りたてていふべき程のもの、は一つも  
ない、而も播磨灘から水島灘、尾灘に至り、遂に山陽の岬と九州の山と相  
擁じて、關門を抱くに終る百餘里の間、翠波洋洋々として、漣漪相戯れ、沿海  
の青山緑を凝して、拳の如く起伏し、眉の如く黛の如く晴には其の色を  
研き、雨には其の姿を代へ、應接に暇なからしむるのは、實に内海の特長  
である、加之其の間に散點してをる數十百の島嶼、右に左に、或は青松を  
被り、或は赭脚を露はし、猩々の舞ふが如く、猿猴の躍るが如く、あらゆる

姿を示してをる、而して、嚴島の景に至っては、天然の美と人工の美と相  
俟って、幽邃の趣きを生じ、海中の小仙寰をなしてをる、瀬戸内海の美は  
作らず飾らず、唯其の儘の姿で、天成の美を恣にしてをる、蓋し明媚とい  
ふ語は蒼顔が我が内海の爲に、特に作って置いた文字であらう。

地圖を披いて、四國を一瞥した人は、藍草薫る吉野川の水洋々として、  
海に注ぐあたりから、北に向へば、鋸の齒のやうな海岸線が出入して、多  
くの港灣を作ってをるのを見るであらう、大鳴戸を隔てて、紀州を望む  
阿波の北、伊豫の東、此に讚岐の一州がある、五劍の峻峰、轟々天を刺して、  
秋霜墜つること早く、前は無數の青嶼を望んで、薫風春を送り來り、煙霞  
遠く霽れて、さらぬだに、明媚なる瀬戸内海中、最も明媚なる眺めである、  
讚岐の地は斯くの如く、天成の美州であるが、殊に其の多度津、津、津、津、津の地  
は、水島灘の青嵐海氣を含んでも、ツとも趣きある景をなしてをる、我が

文化史上の大恩人弘法大師は實に此の多度津のほとり屏風が浦に呱呱の聲を挙げたのである。時に光仁天皇の寶龜五年六月十五日であつた。

此に斷わつて置かねばならぬことがある。それは偉人殊に宗教界の偉人に伴ふ神話傳説に對する吾人の態度である。宗教界の偉人には常に多くの神怪奇蹟を附會し、塗抹したがるものである。殊に其の信徒を然りとする。故に少し頭の古い人達は神話傳説を是れ尊び、其の之を無視した傳記を以つて動もすれば興味索然たるものとして抛つに至ることがある。而も是れは大に誤つてをる。今更説く迄もないが、神話奇蹟と雖も、見方に依つては、之を附會塗抹するに至つた信仰状態を知る好資料となるが、而も荒唐不稽な説を臆面もなく列擧するは吾人の不快に感ずるところである。余は全然左様な神怪奇蹟を信ぜぬ者である。加

之、一種の神學的筆法を以つて、夫れ等に合理的解釋を強ふることをも好まぬのである。余は曩に「日蓮上人言行錄」を著したが、神怪奇蹟に亘ることは努めて書くことを避けた。今弘法大師を叙するについても、余は此の態度を改めぬ。

凡そ荒唐なる神話奇蹟の取るに足らぬことは今日の讀者諸君殊に青年諸君は充分に意識してをられる。故に夫等を書いても、信ずるものはあるまいし、又書いても興味を感ぜられぬであらう。故に此事たる殆んど論を要せざるかの如く見ゆる。而も余が特に此の事を弘法大師に就いて論ずるのは、別に憂ふところがあるからである。憂ふところとは何ぞ。曰く他なし。弘法大師は日本密教の開祖なるが故である。

傳ふるところによれば、密教は印度の龍樹論師に依つて起つた一宗であつて、金剛智、不空等の名僧之を支那に傳へ、空海之を日本に傳へた



一〇  
神祕教である。而して密教は元來佛教と印度教との融和に依つて出来たもので、多くの印度教の神を攝して、大日如來に屬せしめた結果として、非常に澤山の神が出来たのである。然るに、密教の教理は幽玄深遠で、愚夫愚婦の解し得るところではない。故に日本密教は漸く教理よりも儀禮即ち事相を尊ぶやうになつて、遂に迷信に墮し、本來の幽妙神祕な本意を没却してしまつた。今日印度教が極端な迷信と化してをるやうに、現今の密教即ち眞言宗は迷信の府となつてしまつたのである。従つて、其の開祖弘法大師の傳も亦神怪の衣を以つて蔽はれて來た。殊に幼時少時の事は荒唐笑ふべき奇蹟が頗る多い。故に密教に志を寄せ、弘法大師の傳記を讀まんとせらるゝ人は、宜しく一隻眼を備へ、眉に唾することゝ忘れてはならぬ。

余は密教の理の深遠と、大師の人格の圓滿とを仰いで止まぬ一人である。

ある。余は弘法大師の讚美者である。而も公平不偏の眼を以つて彼等を觀んとする者である。余は赤裸々なる彼の人格を紹介しようともふ。故に誕生時のあらゆる神話傳説を閑却して顧みぬのである。要するに、彼の人格は區々たる神話奇蹟の瓔珞華鬘に依つて増減せらるゝ如き薄弱なものではない。日月と並び、天地と立つて、不増不減の金剛身である。

### 家系と幼時

空海の家系については、數種の異説があるが、姓氏錄によれば、其の祖佐伯直は景行天皇の御子稻脊入彦命の後と誌してある。其の後、家系連綿として絶えず允恭天皇の時、讚岐の國造に任ぜられ、相傳へて空海の父、佐伯直田公に至つた。田公は阿刀氏を娶つて四男二女を擧げた。而し

て空海は其の二男であつた。又阿刀氏は佐伯の一族で、外舅大足は當時有名の儒者であつたので、空海は非常なる益を受けたのである。

空海の兄弟は六人あつて、男四人に、女二人であつた。空海の誕生は前に記した通りに、光仁天皇の寶龜五年六月十五日である。當時父母は彼に眞魚といふ名を命じた。此の時彼の威權赫々帝位を覗うた怪僧道鏡は下野の配所薬師寺に歿し、顧みれば後年の獅子兒最澄(即ち傳教大師)は既に八歳の夏を迎へた時であつた。後年一方は比叡の靈峰に據り、他方は高野の幽邃を關いて、南北の宗風京畿を風靡した英雄兒は互に天の一方に或は竹馬を驅り、或は呱々の聲をあげたのである。當時南都の六宗既に隆盛の極に達して、榮華の花正に一陣の烈風を待つ、の有様であつた。而して實際此の二人に依つて、六宗の花は紛々たる終りを告げ、此に新なる綠葉は萋々として萌えたのである。

彼は曠世の偉哲である。従つて其の幼時に於いても、穎悟人を驚かすものがあつたであらう。諸傳は此の間の消息を洩して、種々の異事奇瑞を列ねてをる。吾人も敢て彼の翻々たる一凡見てなかつたことを信ずるに踟躇せぬ。加之彼の一族を觀よ、多くの英名ある士を出してをるではないか。即ち東寺の道實、大師、海印寺の道雄、皆佐伯の一族であつて、彼と前後して生れた人々である。殊に外舅阿刀大足は博學宏識の士で、伊豫親王の學士となり、盛名隠れなかつた。其の他、葛野酒磨、葛野豊雄は共に書博士である。是を以て見るも、いかに彼の博識能書が父祖一族に負ふところあるか、分るであらう。

冀北の野は唯一ツの駿馬を出すを以つて満足しない。森々たる美山は必ずや幾多棟梁の材を産する。彼は斯くの如き風雛を友として、竹馬に跨り、蜻蛉を追うた。或は南風そよそよと、暖潮の春を送る頃は、花を巖

洞に摘み蝶と野邊に戯れ、茜さす朝の香に、袂ぬらし、向うの丘に、小松を曳いて、小さき腕を誇ったこともあつたであらう、或は新緑村を埋めて、真晝の光麥の穂に、白ひ暇路に、蟬の行衛にあこがれ、玉蘆の葉に隠れて、光る螢を眺めて、喜びの掌を叩いたこともあつたであらう、いかに英俊の士と雖も、幼兒は無邪氣である、或は背戸の陽炎に、桃の花を抓った事もあつた、竹の弓に、草の矢を、番うて、小さい的に向つたこともあつた、彼は狂瀾を既倒に回らす底の、俊兒であるが、而も幼い頃は、屏風が浦の真砂路に、逃げ迷ふ蟹を捕へて、満面の微笑を湛へたこともあつたであらう。

人間の歴史は譬へば野の草のやうである、彼の野の草を觀よ、或は長じて白蘭となつて、臺閣の上に香ひ、或は菊となつて、執拗の色に開き、路ゆく人に呪はるゝに至るものもあつて、謂はゆる千草八千草の色とも

どりであるが、而も其の嫩芽僅に萌して、柔かな二葉を開く時は、皆悉く可憐無邪氣な自然の愛兒である、芳もなければ、臭もない、唯二葉の草である、後には高野の奥に、靈香を吐き、靈莖を發いた、芳草も、南海の濱に、二葉の姿を示した頃は、唯可憐なる一小童であつたであらう。

### 少年時代

家は國造の家である、一族には有爲の材が集まつてをる、是を以つて既に彼の幼時から少年時代の教育感化の一斑が察せらるるであらう、加之、當時多度津は南海の良港で、朝に千帆來り、夕に千帆去る程の繁榮であつた、此に於いてか、京畿の文化は是等の交通に依つて輸入せられ、西海の知識は往來する商賈に依つて齎されたであらう、彼の少年時代は斯くの如き光榮ある家庭と斯くの如き豊饒なる文化とに依つて飾

一六  
られた固より武辨の習ひとして、武藝も修めたてあらし、博士を出した家として、手習素讀はいふに及ばず、あらゆる聖教聖語は彼の小さき胸に多大の訓戒を與へ、覺醒と希望とを與へたてあらし、彼の少年時代は實に暖かつた。彼は此の間に於いて、父母の鍾愛の中心となり、貴物と呼ばれて、掌中の珠玉と愛せられた。彼の家庭は實に圓滿であつた。彼の一族は悉く榮えて居た。従つて彼は父母の懷に暖き夢を味ふことが出来た。彼れは生涯を通じて常に順境の人である。故に彼の人格は極めて圓滿純潔で、謂はゆる醇乎として醇なるものである。之を彼の日蓮上人が迫害の間に一生を送り、従つて彼の峻峭猛烈なる人格を鍛成したのに比すれば、好一對の對照である。空海は非常に高潔純美なる人格を有してゐる。彼の日蓮は千仞の秀峰、白雲を劈いて、睥睨濶歩する趣きがある。が是れは大海萬里、碧波汪洋として、百川朝宗する概がある。彼は自ら

劍を揮うて、堅を碎き、銳を挫く。底の勇者ではない。彼は實に策を帷幄の裏に回らし、動かす懼れず、兵戈眼前に交るも、苦茗一碗、沈香一瓣、獨り會心の微笑を洩す底の英俊である。彼は一人を敵とする、匹夫の勇を誇らぬ。彼は銳を裹み、賢を隠し、和光同塵、善惡共に容れ、清濁併せ呑む底の作家である。是れ固より其の天稟の質と、後天の修養とに因ることである。が而も其の家庭の高風と圓滿とが與つて力となり、以て此の圓滿なる人格を鍛へ上げたのである。

彼は書を読み、字を習ひ、多度津の磯に幾多の歳月を累ねた。四書五經の素讀、千字文の手寫は固より、恐らくは夫れ以上の儒書にも親んだてあらし、斯くの如くにして、南海の丘には花咲き、花散ること十五度に及んだ。

十五の春秋

十五の春秋は無限の大宇宙から見れば一瞬にすぎぬ而も樹木は十五年を経れば亭々として山に聳え妻々として緑蔭を旅人に恵むに至るのである人間も決して無爲にはすぎぬ十五の星霜は幼児を變じて結髪の少年たらしむる狩衣の袖に弓矢をたばさむ一個の武夫と化する恐るべきものは時の力である眞魚も斯くの如くにして碧雲を慕ふ齡となつた。

嗚呼南海の天碧雲は蒸々として立昇つてをる黄鳥は久しく幽谷に蟄むに堪へなかつたなつかしい京都には槐樹の陰が斐然として翠をなし移るべき喬木は到る處に巢立つ雛鳥を待つてをるではないか。

### 京都に出て、大學に遊ぶ

清い泉、緑の葉に飾られた多度津の浦は平和であるが、扶搖を搏せん

とする大鵬の巢には適せぬ。

仰げば碧霄遙にして白雲が緩く天風に舞うてをる十五歳の青年の胸には若い血潮が漲つてをる高い希望が溢れてをる新しい酒は新しい囊を要する況んや外舅阿刀氏は當時文化の中心帝京の地たる京都に帷を垂れてをるではないか行かん矣行かん矣行いてかの大學の學窓に槐樹のかをりを嗅ぎかの洛陽の臺樹に桂の枝を折らんとは誰しも思ふところであらう斯くの如くにして十五歳の俊兒は故郷の山を辭した此の時此の際屏風が浦の松風はいかに聲を揃へて此の蚊龍の出關を祝したであらうか多度津が濱の神童は海風を滿帆に孕んで今や東に向つて去つた讚の地は此に其の山水秀麗の氣に育くんだ唯一の愛兒を異郷の天に送つたのである絶代の英雄は此に郷黨の間に朽ち去るの厄運を免れた吾人は佛教の爲に、日本文明の爲に、此の十五歳

の青年の首途を喜びを以って饒せねばならぬ。

彼は難波の里から、京都に著き、此に外舅阿刀大足の家に寓し、漢籍に眼を注ぎ、儒卷に肝膽を砕く身となつた。彼は嘗に阿刀氏に依つて、儒學を研究したのみならず、當時道德の聞え高かつた大安寺の勤操僧都の法苑に列して、佛陀の教へに耳を傾けた。而して當時の信仰に従つて、僧都から虚空藏菩薩求聞持の法を受けた。抑求聞持の法とは、虚空藏菩薩の眞言を一定の規法に従つて、一百万遍唱ふれば、あらゆる教義經文を誦んずることが出来るといふ妙法である。今日から見れば、實に愚なる迷信のやうではあるが、當時南都の佛教既に溷濁の末に流れ、加之宗教上の俗信が盛んであつた時であれば、眞魚が之を學んだとて、敢て怪しむに足らぬのである。况んや、智識慾に燃ゆる青春の時代、斯る妙法ありと聞いた時に、彼は雀躍して之を受くるに踟躇しなかつたであらう。渴

しては水を選ばずといふ、况んや智識の泉にあてがれた青年に於いてをや、眞魚が之を受けたのも決して奇とするに足らぬのである。

彼は斯くの如く、朝には周公孔子の道にいそしみ、夕には佛陀正覺の法音に心を澄まし、拮据勉強怠りなかつた。而して彼の學問は此の間に長足の進歩をなしたのである。

曉の神の抱く無弦の弓はたえまなく、光線の矢を發して止まぬ。朝の美しい姫は老いて夕となり、夕の姿は夜の帳に隠れて、再び朝の空に蘇る。かくて野に萌えた若草は花を著け、葉を飾り、實を結んで、自然の懷に還る。刹那は刹那毎に滅して、日月は流れてしまふ。彼が讚岐の浦に別離の涙を灑いでから、三十六峰は幾度か新緑の衣を更へた。賀茂の河原に雁徂き燕來ること數度であつた。

今や十八歳の春は新なる希望の光を浮べて、彼が學窓を訪れた。彼は

既に京都に出て、儒學に入ツたが、而も唯阿刀氏の家に寓し、外舅の指導を受くるに過ぎなかつた。固より阿刀氏は鏘々たる碩學であるから、彼を提嘶し、奨勵したことは一通りてなかつたに相違ない。又彼は阿刀氏の門に出入する俊兒と書を談じ、經を議して、切磋の功を積んだことも夥しかつたであらう。而も彼は未だいはゞ一種の獨學者である。未だ天下俊傑の叢林には足を入れなかつた。彼は未だ正式の學院に學ばなかつたのである。然るに、時は來つた。吾人は槐樹の陰深き大學の庭に彼の姿を認むるやうになつたのである。

彼は外舅阿刀氏の勧めによつて、大學に入ツた。當時大學は藤原氏の榮華と共に榮え、幾多英俊の登龍門であつた。此處に多くの碩學は各得意の蘊畜を披いて、蘭菊美を競ふ底の盛觀て國典あり、漢籍あり、醇然として天下の叢林であつた。彼は此の處に於いて、直講味酒淨成についで、

毛詩尙書を修め、岡田博士に左傳春秋を受け、經史を繕き、我々として花の散るのも知らなかつた。

彼が斯く大學の學窓に研鑽の功を積んで居た間に時代は益多事になつて來た。彼が年十五にして、故山を出てた時は、絶代の風雲兒最澄は比叡山に初めて其の革命の大旆を翻し、一心三觀の法鼓を洛陽の風に轟した。

阿耨多達三藐三菩提の佛達

我が立つ杣に冥加あらせ給へ

と叫んで天台大師の遺風を日本に繼いた。桓武天皇行幸あつて、南都の六宗は此に動搖を來さざるを得なかつた。宗教改革の新潮は澎湃として、比叡の山から京畿を席捲し、掃蕩せんとした。思想の大圈に渦く新舊兩派の大波巨浪は、鞏固として氾濫し、真如の光は今や北嶺に輝き出て

た。

何等の盛観ぞ、

三論法相律華嚴俱舍成實の南都の舊宗教は徒に形骸を擁して、晩秋の北風浙瀝として林野を捲き、墮葉雨を降す底の衰観を描き出した。教界愈多事、中原の鹿は既に奔逸した。弓弦の音は四方に起ったが、未だ鹿は獲られさうにもない。

嗚呼、時だ！時だ！

今や獲物は野に置かれた偉人は起って弦を張るべき時となつた。然り、而して後年の俊兒は大學の窓下、靜に三更の燈火を掲げて、眼を儒卷の上に注いで居たのである。

此の迷ひ、此の惑ひ

傳ふるところに據れば、父母は彼の幼き時彼を出家せしめんと願うてをることをいひきかせたが、彼は大いに喜んだといつてをる。其の事實の如何は暫く措いて問はぬとしても、當時僧侶の勢威は赫々として旭日の如く、西洋中古史に於ける基督教の狀態と等しく、教權は政權を併せて、其の上に出てんとして居たのである。前に南都の六宗の衰頽を説いたが、夫れは佛教眞精神の衰頽を指したので、物質的形式上の盛観は更に衰ふるところはなかつた。勿論平安遷都に依つて多大の打撃を受けたことは、明かな事實であるが、而も堂塔伽藍の美、法苑講經の盛、我が佛教史に類を絶する程の孝謙聖武兩朝の後をついだことであるから決して衰へてをると稱することは出来ぬ。而して、斯く佛教の盛大なると共に、名僧智識も彬々として輩出し、行基菩薩以下の高僧は、天皇、皇后の歸依を博し、國師となり、三界の導師として、威權聲望遠く三公九卿



の上にあつた彼等の前には十善の尊貴も頭を垂れ給ひ、滿朝の月卿雲客も冠を下げざるを得なかつた斯くて、當時の英俊の士は争うて佛門に投じ、高僧國師となるを以て無上の榮譽とし、畢生の志願とした之に比すれば、儒家博士の如きは月前の小星の如く、其の聲望に於いて、地位に於いて、殆んど比較することを得なかつたのである。

加之、儒家の學たる簡易適切ではあるが、之を三論華嚴の精緻周密に比すれば、其の論理上の形式に於いて、其の教理の深邃に於いて、及ばざること遠いのは何人も拒む能はざるところであらう。實に三論の八不中道、華嚴の十立六相、一方は佛教の理想觀の精を盡し、他方は宇宙觀の微を開き、燦然として絶代の美を恣にしてをる。

斯くの如く、社會的方面に於いても、智識的方面に於いても、佛教は當時の青年の仰いて理想とし、高僧は其の儀表とするところであつた。况

んや滿心の英氣今や天に冲せんとする十八歳の青年に於いてをや、眞魚が出家の志を起し、儒門を脱せんとの考を抱くに至つたのは無理ならぬことである。敢て立身出世といふ方面からばかりでなく、智識を求むること渴者の水を思ふが如き青年時代の熱心は彼を此の方面に驅るに與つて力あつたに相違ない。加之、中心より動き來る宇宙人生に關する懷疑の心は愈益儒教に満足することを得ずして、彼を佛教の方面に向はしめたであらう。

而も彼の希望を妨ぐる障礙は起つた彼の心の水は佛教の野に向つて流れんとしたが、修竹は容赦なく密生して其の通路を塞いだ。修竹とは何ぞ、曰く佛教は忠孝の道を無視すといふ大鐵鎚である。彼の心は此に亂れた。佛教果して忠孝の道に乖くか、佛教果して人倫を無視するか、彼は幾度か迷ひ、幾度か惑うた。今や彼の心は此の煩悶に依つて麻のや

うに亂れた、嗚呼出家の志は何故に非なるか、佛門に身を投ずるは何故に非なるか、忠孝！忠孝！嗚呼佛教と忠孝とは相容れざるか、將亦人は忠孝の圏外に脱出するを得ざるか、孤燈影昏うして心は益亂れ來る、台嶺の雲は一陣の青嵐に依つて之を拂ふことは出來るが、心の雲は如何んしてか拂了することが出來よう、嗚呼苦しい哉、此の迷ひ此の惑ひ、

斯の鐵鎚は實に外舅阿刀氏に依つて下されたのである、彼は固より儒者である、従つて眞魚の出家を好まぬのは亦無理ならぬ事である、加之當時の佛教は寧樂時代の盛觀を経て、正に形骸の榮に誇り、精神は既に枯渴して居たので、名僧智識がないてはないが、佛教の盛榮は財に飢ゑ、名に渴した一種の野心ある卑陋の徒の乗ずるところとなり、其の欲望を遂げ、其の虎狼の心を逞うし、榮華の夢を贖はんが爲に佛門に投ずる者甚だ多く、爲に道德は頽廢し、戒律は亂れ、あはれ高き清き佛陀の教

も今や腐肉の如く、蛆蟻續生する醜狀を呈して來た、桓武天皇も佛教の跋扈を厭うて、後年山背の清境に避け給ひ、此に還都を行はるゝ事となつた位で、還都の理由は固より他に多くあるが、僧侶が俗權にたづさはつて、横暴を極むるので、眉をひそめ給うたことは、其の度々下し給うた詔勅に依つて分るのである、例へば、延暦二年二月の詔に曰く、

此頃貧民の家地園圃を質するを禁ず、今聞く民間已に止み、僧寺猶盛なりと、法に乖き、利を貪り、官を蔑にし、令を慢にす、既に出塵の形となりて、還りて在纏の擧をなす、有司嚴に檢校を加へよ、

とあるを見れば、其の一斑を解することが出來よう、阿刀氏が眞魚を拒んだのも、此の邊の消息が大いに原因となつてをることは疑ひを容れぬ、

溪谷を出てたる水は今や大巖の横はるに遭うた、此の巖を動かさぬ

ばどうしても平野に出づることには出来ぬ遮らるれば遮らるゝ程水聲は激して来る而も之を動かすだけの力はない徒に利を欲し名を喜ぶが爲に出家せんとするは眞魚の志ではない而も忠孝と阿刀氏の拒みは彼に取って絶大の障碍である水は此の二つの何れかを選ばねばならぬ或は儒教の谷に湛へて淵となるか將又忠孝の關巖を透得して佛教の平野に出づるか山禽聲を收めて山幽寂たけり狂ふ溪水はいづこに向つて流るゝであらうか

### 三教指歸成る

病異れば良醫は異つた藥を投ずるが如く人の心の病も一つでないので佛陀聖賢或は佛を説き或は儒を説かれたのである佛儒老其の路を異にすれど其の堂は一つである天心の月は分れて萬洞の影となる

が固是れ一個の端蛾ではないか

今や十九歳の青年は向上の道を認めた眞理の星の光は幾多の雲霧を通して彼が心の海に微かな光を投げた嗚呼忠孝！家に留まり俗に處せねば忠孝の道は立たぬであらうか衣を染め髪を落せば仁義の賊となるであらうか疑問だ疑問だ我が志は既に決した儒佛名を異にする共歸するところは畢竟一である我は三界の導師人天の雄となつて、闇に迷ひ昏きに泣ける人を救ひたい我は幾億生靈の慈父となり甘露の法雨を灑ぎ大悲の法鼓を叩かう是れ我が任である斯くの如くにして、現在未來の兩世に亘つて君を導き參らせ親を救ふならば是れ即ち大忠大孝ではないか我は世に生れた何の爲に生れたかわれば未だ明に之を知らぬ併しながら金冠玉帶春風に欄を拂はせて花を南殿に惜むは我が願ひてない肥馬輕裘飄絮を鐵蹄に踏んで珊瑚の鞭を微月に

あぐるは我が望みてない南船北馬天下何の處にか青山なからん碧落  
を蓋ひとし大地を床として此に自然の家があるてはないか天地の間  
に生れて天地の間に死するは大丈夫の本懐である死んや天の赤兒を  
牧し泣ける者の杖となり迷へる者の船となつて生死の海を渡し眠れ  
る者には鐘となり渴ける者には泉となつて五欲三苦の縛めを解かば  
何の功か之に優らう我は佛弟子とならう我は釋子とならう

\* \* \* \* \*

斯く心に決し筆を呵して聾瞽指歸一篇を作り寓言に托して儒老佛  
三道の得失を論じ三道調和の意見と出家の本願を述べた博引旁證筆  
端饒を發するの概がある被は劈頭第一に其の由來を述べて曰く(三指歸  
とは後彼が廿四歳の時聾瞽指歸に訂正を加へて名を改めたといつた  
而も三指歸の名で知られて居るから標題は之に従ふことゝしたる)  
文の起るには必ず由るところあり天朗なるときは日月星辰の象を

垂れて吉凶を示し人感ずる時は則ち筆を含みて志を述べ是の故  
に鱗身なる伏羲の卦老聃の道德經周代の詩三百篇屈原等の楚賦中  
心に感ずる所ありて之を紙に書す凡聖事を殊にし古今時異りと雖  
も人の憤りを寫す何ぞ志を言はざらん余年志學十五にして外舅學  
士阿刀二大夫に就て喜んで學び鑽仰す二九にして槐市(大學)に遊聽  
し螢雪を猶怠たるに拉き繩錐を勤めざるに怒る爰に一沙門(僧)あり  
余に虚空藏求聞持の法を示す其の經に説く若し人あり法に依りて  
此の眞言一百萬遍を誦すれば即ち一切の教法の文義を諳記するこ  
とを得と是に於いて大聖の誠言を信じて精進勉勵し阿波の大瀧嶽  
に攀ぢ土州の室戸崎に勤念す谷響きを惜まらず明星來影す遂に即ち  
朝市の榮華念々に之を厭ひ巖藪の煙霞日夕に之を願ふ肥馬輕裘車  
駕を看ては則ちかゝる榮華も忽ちに過ぎ去るを思うて電光の如く

幻影の如しと歎く心起り、支離の如き醜陋なる不具者、鶉衣を着たる子夏の如き貧者を見る時は、因果の理の免るべからざるを哀みて休まず、目に觸るゝ所のもの我れに出家を勸むたとひ風は繫くべきも誰かよく我が入佛の志を止めん、爰に親戚阿刀氏、師淨成氏、岡田氏等あり、我を縛するに仁義五常の索を以てし、我を遮るに出家は忠孝に乖くを以てす、余思へらく、物の情は一にあらざ、鳥は飛び、魚は沈むが如く、其の性を異にす、是の故に、聖人之を救ふの教網三種あり、謂はゆる釋李孔、佛敎道、教儒教、これなり、其の説くところ、淺深隔てありと雖も、皆並に聖人の説なり、若し一の羅に入らば、何ぞ忠孝に乖かん、復一人の外甥あり、性は即ち很戾にして、鷹を使ひ、犬を追ひ、狩獵酒色に耽るを以て晝夜に樂みとなし、博遊戯俠を以て常の事となす、其の習性を願れば、惡友惡風に染みて斯くの如くなれり、此の兩事は我をして

三敎指歸の作あらしむるに至れり、所以に龜毛を以て儒客となし、兎角を迎へて主人となし、虛亡士を迎へて、道に入る旨を張り、假名乞兒を請うて出家の趣きを示す、俱に楯戟をつらねて並に姪牙公子を箴しむ、識して三卷となし、名けて三敎指歸といふ、これたゞ憤懣の逸氣を寫すのみ、他の披きみるを望まざるなり、時に延曆十六年臘月の一  
日なり。

彼の文は難語難句續出して甚だ解し易からぬ文章である、而も之れは當時の文體で止むを得ない、彼の文章は、性靈集十卷となつて遣つてをるが、願文、表白文、贈答の詩等が多くて、何れも、文選的である、而して三敎指歸も難文たることに於いては、彼等に劣らない、而も寓意あり、光燄あり、彼の他の文章に比すれば、比較的平易であるから、少しく長いが之に多少の説明註釋を加へて譯出することにした、而も猶難解の譏りを

免れまいが、讀者諸君は十九歳の一青年の作として、多大の興味と、幾分の忍耐を以て讀下してもらひたい。

三六

### 龜毛先生論

龜毛先生といふものあり、天姿辯捷にして、面容魁梧たり、九經三史を心藏に括囊し、三墳伏羲、神農、黃帝の書、八索、八卦を意府に諳憶せり、三寸の舌を機かにひらけば、枯れたる樹にも華咲き、一言僅に陳れば曝せる骸も反りて肉づく、彼の有名なる論客の蘇秦、晏平も此に對へば舌を捲き、張儀、郭象も遙にみて聲を飲ひ程なり、偶、休暇の日に兎角公が館に至り、爰に即ち筵をのべ、席を設け、饌を薦め、盞を飛ばす、三献の酒既に終りて、膝を進めて談話す。

是に於いて、兎角公が外甥に蛭牙公子といふ者あり、其の人と爲り

狼心很戾にして、教に従はず、虎性暴惡にして、禮義につながれず、博戲を業となし、鷹を使ひ犬を追ふを事となし、遊俠無頼にして、奢慢餘りあり、因果の理法を信ぜず、罪福をうべなはず、酔ふまで飲み、飽くまで食ひ、色を嗜み、寢に沈めり、親戚病あれども、曾て愁ふる心なく、疎人相對すれども、敬接の志なし、父兄に狎れ侮り、耆宿を侈り凌ぐ。

時に、兎角公龜毛先生に語つて曰く、聞く王豹謠を好みしかば、已に高唐を變じ、縦之書を翫びしかば、亦巴蜀を化す、橘柚南に徙れば自ら枳と爲り、曲りたる蓬も麻に交れば助けざるに自ら直し、希くは、先生秘鍵を披き陳べて頑心を覺し示し、隱鈴を扣き攄べて、彼が愚を教へ諭し給へ。

先生曰く、吾聞く、上智は教へられず、下愚は移らずと、古聖すら痛む今愚蛭牙公子を諭すこと何ぞ易からん。

三七

兎角公が曰く、夫れ物に體し、情によるは先賢の論ずるところ、時に乗じて藻を擒ふるは古へより貴ぶところなり。故に韋昭が博奕を譏るの篇、元叔が邪を疾むの賦、並に紺素(書籍)に載せて、歴代の鑒たり。誠たり。又鈍刀も砥の助によりて之を磨けば、骨を切ることを得、重き車も油をひけば軽く走ることを得、無智なる鐵木すら既に斯くの如し。況んや情ある人類をや。何ぞ仰ぎ望みて至らざらん。今先生邪惡の志をそしぎ、彼の迷へるみちを指し、彼が暗き瞳を鍼し灸して、此の直しき道に歸せしめよ。斯くの如くんば、豈盛んならざらんや。復快ならざらんや。

こゝに龜毛先生心煩ひ神惱んで茫然として長息す。天を仰いて愀みを含み、地に俯して以て思ひを深うす。喟焉としてやゝ久うし、驪然として哈うて曰く、三たび勸むること慇懃なり。來命を拒み難し。今當

に微管を傾け竭し愚流の行迹をあらはし、拙蠹を盡し酒して、姪牙公子の心を攝する梗葉を陳ぶべし。但し懸河の妙辯舌端に短く乏しく、北海の湛智心府に乏しくまれなり。筆しては痾を除くを謝し、詞は將を殺すに非ず。彼の趣を披かんと欲すれば、口の裏に言はんと欲し、黙して罷みなんと欲すれば、胸中に憤々たり。抑へ忍ぶことを得ず。聊か擧げ引きを事とす。宜しく一隅を示すべし。孰か三端を扣かん。

竊に惟んみれば、清濁分れて天地の始をなす。人は陰陽二氣を稟けて等しく五常の性を懷けり。是に於いて、賢く智ある人は三千年に一度開くといふ優曇華の如く稀に、愚人は林の如く多し。是の故に、善を仰ぐの類は猶麟の角よりも稀れに、惡に耽るの輩は既に龍鱗よりもさかんなり。星には風を好むものあり、雨を好むものあるが如く、人の操行は星の如く異り、人の意の異なるは人面の似ざるが如く、區々別々

たり、玉石みちを殊にして、九等を分ち、狂者ちまたを別ちて遠く三十里を隔てたり。各好む所に趣けば、石を水に投ずるが如く、並に惡む所に赴けば、脂を水に沃るに似たり。寔に鮑塵の嗅氣猶未だ改變せず、麻畝の直性亦未だ萌さざるに由れり。遂に頭の蝨が黒く化するが如く、性質も變化し、晋の齒大原の人糞を食ふ故、黄くなるがごとく、人の心も漸く染み來る。表面は虎皮の紋美しきがごときも、内心は錦袋に糞を盛るが如し。學ばずして一生涯、視肉の譏を招き、戴盆の誚り萬葉に傳へたり。豈辱にあらずや、亦た哀しからずや、余思へらく、楚の璞光を致さんには、必ず礪に磨かざる可からず。蜀の錦彩を出すは、江に濯ぐが故なり。劫盜の戴淵志を變じて、將軍の位に登り、惡棍の周處心を改めて、忠孝の名を得たり。然らば、即ち玉は琢磨に緣りて、車を照す器となり、人は切磋を待ちて、穿犀の方を致す。教に従ふこと圓かなる時は

則ち庸夫の子も三公に登りつべく、諫めに逆ふこと方なるに似たりんには、帝皇の裔も反りて匹備となる。木は繩に従ひて直しといふこと已に昔の聰きに聞けり。人は諫を容れて聖なりとは、豈今空しからんや。上天子に達し、下凡童に及ぶまで、未だ學ばずして能く覺り、教へに乖きて自ら通ずる者はあらず。夏殷傾滅し、周漢興隆すること並に是前覆の龜鏡、後誠の美風なり。戒めざるべけんや、慎まざるべけんや。宜く汝、姪牙公子耳を、伶倫に借り、目を離朱に貸りて、つゝしんで吾が誨へを聞き、汝が迷へる衢を覽るべし。夫れ汝が性たる、上は二親を侮りて、告面の孝なく、下は萬民を凌ぎて、隱恤の慈なし。或は弋獵を宗として、山坳跋涉し、或は釣罟を業となして、溟海に櫂櫂す。日ねもす、離浪して、已に州吁に過ぎたり。夜もすがら博奕して、亦嗣宗に踰えたり。話言遠く離れて、寢食盡く忘れたり。水鏡氷霜の行盡く、谿壑にさえ、貪婪



の情競ひ熾んなり。毛類を咀嚼すること既に師虎の如く、鱗族を喫啖すること亦鯨鯢にすぎたり。曾て愛子の想ひなく、豈己完の願みあらんや。酒を嗜みて酩酊すること渴猩も耻を懷き去り、逐うて食を望むこと飢蛭も儻にあらざ。蝸の除く塘の若し、草葉の誠めを顧みず。明もなく晦もなし。誰か麻子の責を致さん。恒に蓬頭の婢妾を見ては已に登徒子が好色に過ぎたり。况んや冶容の好婦に於ては、術婆伽が胸を焼くこと莫らんや。春馬夏犬の迷ひ已に胸臆に煽んなり。老猿毒蛇の觀何ぞ心意に起らん。倡樓に向て喧樂すること恰も獼猴の杪に戯るるに似たり。學堂に臨んで欠伸すること還て老兔の陰に睡るがごとし。首をかけ股を刺すの勤め全く心の裏に闕け、觴を提げ蟹を捕ふるの行専ら胸中に包めり。數十の燿燿囊中に聚めず、一百の青鳧錢の異名常に杖頭に懸けたり。若し偶寺に入りて佛を見ては、罪咎を懺せず

して、還りて邪心をなす。未だ一稱の因遂に菩提となり、四銖の果終に聖位に登るといふことを知らず。夜を過ぎて誨を蒙むれども、己が悪を誅せずして反りて提撕を恨む。豈思はんや。諄々たるの意猶子よりも切に懃々たるの思ひ母兒よりも重きことを、好んで人の短を談じて十韻の銘を顧みることなく、屢多言を事として三絨の誠に鑿みず。明に讚言の骨金を鑠すことを知りて、樞機の榮辱を發することを慎まず。是の如きの品類寔に繁く徒あり、禹の筆も何ぞ書さん。隸の算も豈計らんや。もし復飽くまで滋味を食ひて、徒に百年を勞せんこと既に禽獸に同じ。暖に錦繡を衣て空しく四運を過さんこと亦犬豚の如し。禮記に云く、父母疾ある時は冠する者櫛らず。行起に翔はず。琴々御せず。酒顔色を變ずるに至らず。笑ふこと齒根見ゆるに至らず。これ乃ち親を思ふこと切骨にして、敢へて容装せざるなり。又云く、隣に喪あ

る時は、春くに杵歌せず、里に殯あれば、街に歌はず。是復人と憂を共にして、親疎を別たざるなり。それ疎遠に於いて、斯くの如し。昵近に於いて、彼れが如し。故に親族不豫なる時に、醫を迎へ、藥を嘗むるの誠なし。則ち賢士哲夫、目を側て汗を流す。閭巷に憂ひあれども、想ひ愁ひ問慰するの情無し。則ち傍親有識、寒心して地に入る。形禽獸に殊なれども、何ぞ木石に同じき。體人類の如し。何ぞ鸚猩に似たる。嚮に、蛭牙公子をして、若し能く惡を翫ぶの心、移し専ら孝徳を行はば、則ち血を流し、釜を出し、箒を抽んで、魚を躍らしむるの感。孟丁が輩をぬき、んで、蒸々たる美を馳せん。忠義に移さば、則ち檻を折り、窓を壞り、肝を出し、心を割くの操。比弘の類に踰えて、諤々たる譽れを流さん。經典を講論せば、東海西河も舌を結んで、辭謝せん。史籍を涉獵せば、南楚西蜀も口を閉ぢて、揖讓せん。書を好まば、則ち鷓鴣虎臥の字、鐘張王馭も毫を擲て

耻を懐かん。射を習はば、則ち落鳥咒猿の術、羿養更蒲も、弦を絶ちて、歎きを含まん。戰陣に就かば、張良孫子も、三略の術なきを、慨まん。稼穡に赴かば、陶朱猗頓も、九穀の貯へなきを、愁へん。政に蒞まば、則ち四知に跨て、譽れを馳せん。獄を斷ぜば、則ち三黜に超えて、美を飛ばさん。清慎ならば、則ち孟母孝威が流ならん。廉潔ならば、伯夷許由が侶ならん。若し神を醫道に赴け、心を工巧に馳せば、心を換へ、胃を洗ふの術。扁華に越えて、以て奇を馳せん。蠅を斷り、鳶を飛ばすの妙。匠輪を凌ぎて、異を翔らかさん。若し是の如くなる時は、則ち汪々たる萬頃彼の叔度、同じく森々たる千舟、此の度嵩に比せん。觀る者は、深淺を測らず。仰ぐ者は、高下を度らざらん。猶須く郷を擇んで、家と爲し、土を簡んで、屋と爲し。道を握りて、床となし。徳を擧げて、褥となし。仁を席にして、坐し。義を枕にして、臥し。禮を被にして、以て寝ね。信を衣にして、以て行く。可し。日

四六  
に一日を慎み時に一時を競ひ、  
玳々として鑽仰し、切々として斟酌せん。標囊黄卷をば吐握にも弃てず、青簡素鈺をば顛沛にも離たざらん。斯の如くなる時は、則ち會宴の講義には五鹿の角を摧き、諸生の論難には五十の筵を重ねん。森々たる辭泉蒼海と共にして、以て沸涌し、彬々たる筆峰は碧樹と共にして、以て榮を縦にせん。珍々として玉の如く振ひ、孫馬を凌いで、以て瑤を連ね、暉々として金の如く響き、楊班を踰えて、藥を貫かん。離騷を奏して時をうつさず、鸚鵡を賦して點を加へざらん。詩賦の苑に翱翔し、藻製の野に休息せん。然らば則ち翹々たる車乗門外に軫をまじへ、  
幾々たる玉帛囀中に塵を連ねん。魏侯の輅蓬門に軾せば、何ぞ更に角を扣かん。周公の輦草廬に敗せば、何の暇ありてか、鈇を彈せん。僂倖せずして、以て臺鼎に登り、自ら銜はずして、以て槐棘に齒る。青紫を地芥に拾はんこと、瞬目にして致しつ可く、印綬

を股錐に惣へんこと、踵を旋すに期しつ可し。爰に則ち孝を移して、主に竭くし、涕を流して、僚に接はらん。干將を佩びて、以て鏘々たり。圭笏を搢んで、濟々たらん。紫震に進退し、丹墀に俯仰せん。入りては萬機を議らば、譽れ四海に溢れ、出ては百姓を撫せば、毀衆舌に断たん。名は簡牘に策され、榮は後裔に傳はらん。高爵の綬んずるところ、美諡の贈くるところ、豈不朽の盛事にあらずや。何ぞ亦更に加へん。若し復遊俗の前には行樂に日あれども、返眞の後には相娛むに人莫し。天上の牽牛も猶獨り住むことを歎き、水中の鴛鳥も必ず比宿することを歎ぶ。故に詩に七梅の歎あり、書に二女の嬪を貽せり。然れば則ち人展季に非ず。誰か伉儷なからん。世子登に異り、何ぞ隻枕すべき。必ず須く行雨の蛾眉は彼の姬氏を筮ひ、飄雪の蟬鬢は此の姜族を占ふ可し。轟々たるむかへの輅隱々として、衢に溢ち、驚々たる送りの騎濡艾として、郭に

側たん。從者踵を躡んで袂幕天を蔭ひ。徒御肩に駕して汗霏地に灑が  
ん。紫蓋空に飛んで雲の如く翔り、繡服地を拂ひて風の如くに歩せん。  
訝迎の禮を盡し、賸送の義を極めん。牢を同らし、尊を同らし、香を合せ、  
體を合せん。珠簾を褰げて鳳儀に對ひ、金牀を拂うて龍體を比べん。翠  
瑟を凌いて韻を調べ、膠漆に超えて契りを同らせん。僧老を東牀に笑  
ひ、同穴を南鵝に惺けらん。一期の愁を消し、百年の樂みを快くせん。又  
時に九族を聚め、數々三友を速かば、則ち八珍の嘉肴を陳ね、九醞の旨  
酒を酌まん。羽觴を飛ばして以て數無く、滿白を擧げて、環の如くなら  
ん。客は八音を調べて言歸の詩を詠じ、主は二轄を投じて途露の滋きを  
を稱せん。日を重ねて歸らんことを忘れ、夜を疊ねて舞踏し、寰中の逸  
樂を縦にし、世上の賞般を盡さん。寧ろ樂しからずや、宜しく姪牙公子  
早く愚執を改めて専ら余が誨へを習ふべし。此如くならば、即ち親に

事ふるの孝窮り、君に事ふるの忠備はり、友に交るの美普く、後を榮す  
るの慶滿てり。身を立つるの本名を揚ぐるの要蓋し、斯くの如き歎。孔  
子の曰く、耕す時は餒其の中にあらず、學ぶ時は祿其の中にあらずと、誠な  
るかな。斯の言當に紳骨に鏤書すべきのみ。  
奥に姪公子跪いて稱して曰く、唯唯敬んで命を承けぬ。今より以後  
心を專にして奉習せん。

是に於いて、兎角公席より再拜して曰く、よいかな。善い哉。昔は雀變  
じて蛤となると聞いてなほ疑怪を懷きよ。今は姪牙が鳩の心忽に化  
して鷹となるを見たり。葛公が白飯忽に黃蜂となり、左慈が形を改め  
て倏ちに羊類となるも、豈先生の勝辯狂を變じて聖となせるに如か  
んや。謂ゆる漿を乞て酒を得、兎を打て鷹を獲といふ斯の謂ひ歎。詩を  
聞き、禮を聞くの客何ぞ今日の勝誘勝誨に過ぎん。只姪牙の誠めたる

のみならず、余も亦身を終るまでの口實に充てん矣。

五〇

### 虚亡隠士論

虚亡隠士といふ者あり、先きより座の側にあり、愚を伴はり、智を論じ、光を和げ、狂を示す。蓬亂の髪は登徒が妻に踰え、襜褕の袍は董威が聲に超えたり、傲然として箕踞し、莞爾として微笑す、唇を陳べ、頰を緩め、睢盱として告げて曰く、

吁、吁、異しい哉、卿が藥を投ずること、前には千金の裘を視て、猶龍虎に對へるが如く、今は寸歩の蛇を視て、鼯鼠を瞻るが如し、如何んか己が身の膏肓を療せずして、輒く爾他人の腫脚をあらはす、卿が病を療するが如きは、治せざらんには如かじ。

粵に龜毛公愕然として、顧眄し、有視として進んで曰く、先生若し異

聞あらば、請ふ爲に之を啓沃せよ、僕、兎角公が命に忍びずして、帥爾に輒ち之を談ず、伏して乞ふ、先生春雷、虚亡子の道をいふを秘するとなかれ。

隠士が曰く、夫れ赫々たる弘陽輝光、燭に朗らかなれども、然も、盲瞽の流は、其の曜りを見ず、般々たる震震響き、猛厲なれども、しかも、聾耳の族は、彼の響を信ぜず、况んや、太上の秘録、凡耳に遯なるをや、天尊の隠術、如何んか妄りに説かん、血をすゝり、盟を遣すも、太だ聞くを得難く、骨に鑲めて、信を示すも、何ぞ曾て傳へ易からん、所以はいかんとなれば、短き繩の水を汲む、井の涸れたるに疑ひを懷き、小き指の潮を測る、猶底極まれるかと謂へり、苟も其の人にあらざれば、談を喉の内に閉ぢ、實に其の器にあらざれば、櫃を泉底に秘す、而して後に機を見て、始めて開き人を選んで乃ち傳ふ。

是に於いて、龜毛公等並に相語りて曰く、昔漢帝の仙を希ひし悃に王母に請ひ、長房が術を得たる亦壺公に學びき。吾等たまさかに曾て那原が千里の尋無くして、長く彭祖が萬祀の壽あらんこと、豈美ならざらんや、亦幸に非ずや。

二人並に進んで再拜稽顙して、隱士に請うて曰く、重ねて望むらくは、誨へを垂れよ。

隱虛亡隱士が曰く、壇を築いて誓を約せば且く一二を示さんのみ、爰に則ち命を承て言の如くす。壇に昇りて誓ひを結び、坎に臨んで、盟を請ふ。契事既に畢りて、増々指擡を仰ぐ。

隱(虛亡)隱士が曰く、然り矣。汝等恭しんで聽け。今當に子に授くるに不死の神術を以てし、汝に説くに長生の奇密を以てすべし。汝をして、蜉蝣の短齡を以て龜鶴と相競ひ、跛驢の驚足を以て應龍と齎しく駭

からしめ、三曜に並んで以て終始し、八仙と共にして相對し、朝には三嶼の銀臺に遊んで終日優遊し、暮には五岳の金闕を経て、夜もすがら逍遙することを得しめん。

龜毛等對へて曰く、唯唯、聞かんと欲す。

隱が曰く、夫れ大鈞陶甄して彼此の異なし、洪鐘鎔鑄して愛憎の執を離る。獨り彼の松喬にのみ厚うして、此の項顔をのみ薄するに非ず。但よく彼の性を保つと持つこと能はざるとのみ、養性の方久存の術その途極めて多し。具に述ぶること能はず聊か大綱を撮て其の少分を示さん。又昔奏の始皇、漢の武帝内心には仙を願へども、外事は俗に同じ。鐘鼓鏗鏘として已に耳の聰を奪ひ、錦繡燦爛として忽に目の明を損ず。紅臉朱唇暫くも離るゝこと能はず。鮮鱗生毛片食にも退けず。屍を臥せて觀となし、血を流して川と爲し、是の如きの事類以て陳説

し難し。流すに涓滴を以てし、深すに尾閭を以てす。心行相違して徒に  
 費勞を深くす。是れ猶方底に圓蓋を覆うて其のよく合はんことを願  
 ひ、功力を寒氷に極めて其の飛焰を求むるが如し。何ぞ其れ愚なるや。  
 然れども、猥俗の謂へらく、帝皇至て貴きも猶亦得ず。而も况んや凡人  
 をやと。此を以て虚誕となし、此を以て妖狂と號す。何ぞ其れ迷へるや。  
 樂太兩帝の徒此れ乃ち道中の精練、仙を好むの瓦礫なり。深く惡むべ  
 きことの甚しきなり。夫れ是の如くなるが故に、傳ふるに必ず人を擧  
 ぶ尊卑を以てするにあらず。宜しく汝等心を專にして學を受け、後の  
 毀りを致すこと無らんのみ。能く學ぶの人は蓋し此に異なる歟。手足の  
 及ぶ所、疥癩をも傷らず。身肉の物、精唾寫さず。身に是塵を離れ、心に貪  
 慾を絶つ。目に遠く視ることを止め、耳に久しく聽くこと無れ。口に虚  
 語を息め、舌に滋味を斷つ。克く孝に、克く信に、且つは仁あり。且つは慈

あり。千金をすて、以て薑芥の如し。萬乘に臨んで、脱履の如し。縷腰を  
 視ること、鬼魅の如く。爵祿を見ること、腐鼠の如し。怕乎として、無爲な  
 り。澹然として、事を減ず。然る後に始めて學ぶ時は、掌を指すに異らず。  
 但俗人の尤も翫好する所は、則ち道侶の甚だ禁忌する所なるのみ。若  
 し能く此を離るゝ時は、仙を得ること難きにあらず。五穀は腑を腐ら  
 すの毒。五辛は目を損するの鳩。醴醪は腸を斷つ。劍豚魚は壽を縮む  
 るの戟。蟬鬢蛾眉は命を伐るの斧。歌舞踊躍は紀を奪ふの鉞なり。大い  
 に笑ひ、大いに喜び、極めて忿り、極めて哀しむ。此の如きの頭各損する  
 所多し。一身の中既に此の如きの敵多し。若し此の讎を絶たざれば、長  
 生久存未だ聞く所あらず。此を離るゝこと俗に於いて最も難し。此を  
 絶てば、仙を得ること尤も易し。必ず須く先づ其の要を察して、乃ち服  
 餌すべきのみ。白木黄精、松脂穀實の類は、以て内の痾を除き、蓬の矢葦

の戟神符咒禁のたぐひは以て外難を防ぐ、呼吸時を候ち、緩急節に随ふ、天門を扣いて以て醴泉を飲み、地府を堀りて以て玉石を服す、草莖完莖は以て朝の飢を慰め、伏苓威信は以て夕の憊れに充つれば、則ち日中に影を淪し、夜半に能く書す、地下を徹瞻し、水上に能く歩す、鬼神を隸となし、龍驤を騎となし、刀を呑み、火を呑み、風を起し、雲を起す、先の如きの神術何爲れぞ成らざらん、何の願か満たざらん、又白金あり、黄金は乾坤の至精神丹、練丹は藥中の靈物なり、服飾するに方あり、合造するに術あり、一家成ることを得れば、門を合して空を凌ぐ、一銖織に服すれば、白日に漢に昇る、其餘の符を呑み、氣を餌ふの術、地を編め、體を變ずるの奇推するしかく、廣ろく勝げて、數ふ可からず、若し彼の道に叶ひ、若し其の術を得れば、即ち形を改め、髪を改め、命を延べ、壽を延ぶ、死籍數々削り、生業長く、久し、上は則ち蒼々に跨りて、翱翔し、下

は則ち倒景を躡んで、獲律す、心馬に鞭ちて、八極に馳せ、意車に油して、以て九空に戯る、赤鳥の城に放曠し、紫微の殿に優遊す、織女を機上に視、姮娥を月中に要む、帝軒を訪うて、伴となし、王喬を覓めて、徒となす、莊鵬の床をみ、淮犬の迹を見る、列馬の厩を窮め、牽牛の泊りを盡す、心に任せて、偃臥し、思ひに逐ひて、昇降す、淡泊として、慾無し、寂寞として、聲無し、天地と與にして、長く存し、日月と將にして、久して、樂しむ、何ぞ其れ優する哉、何ぞ其れ曠なるや、矣、東父西母、何ぞ怪むに、足らんや、是れ蓋し吾の聞き、學ぶところ、靈寶の密術歟、

世俗を顧み、惟んみれば、貪慾に纏縛せられて、心意を煎迫し、愛鬼に羈縻せられて、精神を焦灼す、朝夕の食を營んで、夏冬の衣に勞す、浮雲の富を願うて、如泡の財を聚め、不分の福を邀めて、若電の身を養ふ、微樂朝に臻れば、天上の樂しみを笑ひ、小憂夕に迫れば、塗炭に没するが如



し、娛曲未だ終らざるに、悲引忽ち逼る。今は卿相たれども、明は臣僕と爲る。鼠上の猫の如く、鷹下の雀と爲る。草上の露を恃んで朝日の至るを忘れ、枝端の葉を憑んで風霜の至るを忘る。咨痛む可きかな。何ぞ鶴鵝に異らん。曷ぞ言ふに足らんや。其れ吾が師の教と汝が説く所の言と、汝等が樂む所と、吾が類の好む所と、誰れか夫れ優劣なる。孰れか其れ勝負なる。

是に於いて、龜毛公、蛭牙公子、兎角公等並に啓いて稱して曰く、我等幸に好會に遇うて適諫言を承はる。方に鮑壘の至て梟き方壺の極めて香しき、雙糜の醜き、子都か好き、金石の隔てあり、薰蕕の比無きを知りぬ。今より以後心を專にし神を練り、永く斯の文を味はん也。

### 假名乞兒論

假名乞兒といふものあり。いづくの人なるかを詳にせず。蓬茨の衝に生れて、繩樞の戸に長ぜり。高く囂塵を屏けて、道を仰いて勤苦す。漆髮剃り隕して、頭は銅盆に似たり。粉艶都べて失せて面は瓦塙かと疑ふ。容色頽頓、體形叢爾たり。長脚骨豎て池邊の鷺の如し。縮頸筋連りて泥中の龜に似たり。五綴の木鉢は牛囊に比して以て常に左の肱に繫けたり。百八の櫃子は馬絆に方んで、亦右の手に係けたり。道神の履を著いて牛皮の履を弃つ。馱馬の索を帶にして、犀角の帶を擲つ。茅座を常に提げたれば、市の邊の乞人も頰を押して俯し羞ぢ。繩牀緇負しつれば、獄の傍の盜士も膝を抱いて仰き歎ず。口破れたる軍持(瓦瓶は油を沾るの肩に異ならず。銀落ちたる錫杖は還りて薪を賣るの手に同じ折類(鼻の莖隴なきをいふ)と高匡(深腫子をいふ)と頽頽(曲頽をいふ)と、隅目(角眼にして視るをいふ)と、瞬める口鬚無うして孔雀の貝に似

たり。缺けたる唇齒疎にして、狡兎の唇の如し。偶市に入る時は、則ち瓦礫雨の如くに集り、若し津を過る時は、則ち馬屎霧の如くに來る。呵毘私度は常に膠漆の執友となり、光明婆塞は時に篤信の檀主となり、或時は金巖に登り、雪に遇うて坎墮困窮をいふたり。或時は石峯に跨り、以て糧を絶ちて、輾轉たり。或時は雲童の娘を賙て、心を懈んで思ひを服け、或時は許倍の厄を觀て、意を策して厭ひ離る。霜を拂ひて蔬を食ひ、遙に仮が行に同じ。雪を拂ひて、肱を枕とす。還りて孔の誠めに等し。青幕を天に張りて、房室を勞せず。縞幌白雲をいふを、嶽に懸けて、幃帳を營まず。夏は則ち意を緩うし、襟を披きて、大王の熈風に對ひ、冬は則ち頸を縮め、袂を覆うて、燧帝の猛火を守る。椽飯茶菜一句を給せず。紙袍葛祖二肩を蔽はず。一枝に逍遙し、半粒に自得す。何曾が滋味を願はず。誰か子方が温裘を愛せん。三樂の叟榮啓期も此に比すれば愧るこ

とあり。四皓の老東園公、鹿里先生、綺里季、夏黃公も此に對へば、儂に非ず。形は笑ふ可きに似て、志は已に奪はれず。

或人告げて曰く、我れ師に聞けり。天地の尤靈寔に人、其れ首たり。惟れ人の勝れたる行は、惟れ孝、惟れ忠、餘の行は萬差なれども、此の二は其の要なり。所以に遺體を毀はず、危きを見て命を授く、名を擧げ、先を顯はす。一をも廢すれば不可なり。又一生の娛樂、惟れ富、惟れ貴、百年の蘭友、誰か妻孥に比せん。季子路が萬鍾を悲む、唯逝親を感じ、參曾子が九仞に登る當に、主に仕ふるによれり。今子親あり、君あり、何爲れぞ。養はざる仕へざる、徒に乞丐の中に淪んで、空しく、迷役の輩に雜はる。辱行は先人を忝かしめ、陋名を後葉に遺す。惟れ寔に大辟の加ふるところ。君子の恥づる所なり。而も汝之行ふ親戚、汝に代りて地に入り、疎人、汝を見て目を掩ふ。宜しく早く心を改めて、速に忠孝に就く可し。

乞兒慙然として問うて曰く、何をか忠孝と謂ふ乎。

答へて曰く、聞にあるの日は面を怡しめ、顔を候ひ、心に先ち力を竭し、出入に告面し、夏冬に温清して定省、色養す之を謂ひて孝となす。虞舜、周文之を行うて帝位に登り、董永、伯喈之を守りて美名を流ふ。占筮の年、初官の年をいふ。孝を移し、命を盡し、顔を犯して諫争す。上天文に達し、下地理を察す。古へを稽へて今に擬し、遠きを柔けて近きを能くす。四海を紀綱として一人を匡弼す。榮後裔に及び、譽れ來葉に流はらん。是の如きを忠となす。伊周箕比伊尹、周公箕子、比干をいふ。蓋し其の人歟。

假名答へて曰く、

親を安んじ主を匡す。是の如きの類を忠と爲し、孝と爲すこと伏して命の旨を承はんぬ。是れ實に余不肖なりと雖も、然も猶頗る禽獸に

異なる。一念離れず、五内爛裂す。夫れ父母覆育提挈、慙懃なり。其の功を顧るに、高きこと五岳に並び、其の恩を思ふに、深きこと四瀆に過ぎたり。骨に鏤め、肌に銘し、誰か敢へて遺忘せん。報せんと欲するに極りなし。反さんと欲するに尤も厚し。南垓を詠じて恥をいだし、蓼莪を誦うて以て愁を含む。彼の林鳥を見てひねもす、焦灼し、此の泉類を思うて夜もすがら爛肝す。常に歎むらくは、楚河未だ決せざるに、周紂肆に就き、吳劍未だ許さざるに、徐子墓に臨まんことを。老親は幡々として冥壤に臨近す。此れ余が頑々たる哺を反すに由し無し。居諸日月をいふ。矢の如くにして、彼の短壽に迫る。家産澆漓して、墻屋傾くになんなんとす。二兄重て逝いて、數行汜瀾たり。九族俱に匿しうして、一心潺湲たり。慷慨の思を起して、日を以て月に繼ぎ、悽愴の痛みを興して、旦より夕にいたる。嗟呼悲しい哉。進んで仕へんと欲すれば、已に竿を好むの主

無く、退て黙せんと欲すれば、亦祿を待つ親あり、進退の維れ谷るを歎き、起居の狼狽たるに纏はる。則ち頌を作りて懐ひを寫して曰く、

力を肆て畝に就く時は、曾て筋力無し。

角を扣いて將に仕へんとする時は、既に寔か識なし。

智無うして官にあれば、譏りを空職に致す。

貪ること有りて素餐すれば、誠を尸食に遺す。

濫竿の姦行は、已に尤も直きにあらず。

雅頌の美風は、但周の國に聞くのみ。

彼の孔の縱聖なりし、栖遑として黙せず。

此れ余が太だ頑かなる、當に何れの則にか従ふべき。

進まんと欲するに才なし、將に退かんとするに逼ることあり。

進退兩つの間、何ぞ歎息すること夥しき。

是に於いて、頌の詞取り畢りて、沈吟すること良久して、乃ち書を作りて曰く、

僕聞く、小孝は力を用ひ、大孝は匿しからず。是の故に泰伯は髪を剃りて夷俗に入り、薩埵は衣を脱して長く虎の食となる。父母地に倒るの痛みを致し、親戚天に呼ぶの歎きあり。此に因て視れば、二親の遺體を毀ひ、九族の念傷を致す。誰か復此の二子に過ぎん。當に卿が告ぐるが如く人は、並に不孝を犯せり。然りと雖も、泰伯は至徳の號を得、薩埵は大覺の尊と稱せらる。然らば則ち苟も其の道に合はば、何ぞ近局に拘らん。羅卜(目連の前生の名)が母の苦みを抜き、那舍が父の憂ひを濟ふは寧ろ大孝にあらずや。亦善友にあらずや。余愚陋なりと雖も、雅訓を斟酌し、遺風を讃仰す。毎に國家の爲に先づ冥福を廻らす。二親一切に悉陰功を讓る。此の惠福を摠て忠となし、孝と爲す。然れども、卿但

筋力の盡すべく、身體の屈すべきを識りて、未だ于門の高かるべく、善因善果嚴墓の掃ふ惡因惡果べきを視ず。何ぞ其れ劣なるや。然れども、此の書未だ心に委せず。後に當に之を顯し陳ぶ可し矣。

固く執ることは是の如くなるときは父兄にも拘はらず、親戚にも近づかず。萍の如くに諸州に遊び、蓬の如くに異境に轉ず。こゝに雲漢星開けて、六府の藏闕焉として已に空し。石窟に儲け盡きて八萬の衆怒然として忽に窮す。飯内に塵飄り、籠中に苔充てり。是に於いて思へらく、内(佛教)には食によりて住することを顯はし、外(儒教)には學を修むることの末なるを言ふ。如かず襤褸の飢人を早く豊郷に託せんには、即ち松林より發して聚樂の京に赴き、知足の意に乗じて、鉢を捧げて直ちにゆく。從童すべて無うして、子として佛經を持す。兎角が舎に到りて立ちて門の楹に立てり。是に於いて、龜毛と隱士とが論諍の戰

庭に逢ひぬ。乞兒思ふに各電の如き體を扶け、四生の囿に宿り、夢に似たる意を擧げて、十八の亭に入る。二子の論は有爲色心の變化現象の法にすぎずして、常住の法にあらざるをたとへていへり。十八亭は十八界のことにて、六根六境六識、幻城を五陰の空しき國に築き、泡軍を四蛇の假りの郷に興す。蛛蝥の網を甲にし、蟻螟の騎に鎧せり。蝨皮を鼓として陣を驚かし、蚊羽を旗として以て旅を標す。我見の戟を杖ついで、寡聞の劍を拵ひ、霜の如き臂を攘げて、魍魎の原に戰ふ。利欲の談を競うて、寰中の辯を争ふ。鼻に耳を傾けて漸くさゝ、目を撃きて佇立す。各我は是なりと思ひ、並に彼は非なりと言ふ。時に(乞兒)自ら思はく、溜水の微辯、燭火の小炎、だも猶既に是くの如し。况んや吾は法王の子なり。蓋ぞ虎豹の鉞を摧き、螳螂の斧を拉がざらん。遂に乃ち智慧の刀を砥で、辯才の泉を湧し、忍辱の介を被り、慈悲の驥に駕して、疾にもあ

六八  
ら○す○徐○に○も○あ○ら○ず○龜○毛○が○陣○に○入○り○驚○か○ず○憚○ら○ず○隱○士○が○旅○に○對○す○焉○  
に○於○い○て○壘○を○出○て○盤○桓○し○壽○に○入○り○て○跋○扈○す○茲○に○因○り○て○先○ん○ず○る○  
に○孔○璋○が○檄○を○以○て○示○す○に○魯○陽○が○書○を○以○て○す○將○帥○悚○ぢ○懼○れ○て○軍○士○  
氣○を○失○ふ○面○縛○降○服○し○て○亦○に○血○ぬ○る○の○勞○あ○る○こ○と○な○し○但○し○野○心○改○め○  
難○う○し○て○情○に○猶○豫○を○懷○け○り○即○ち○涙○を○流○し○首○を○摩○て○悲○し○み○を○含○ん○て○  
噲○し○て○曰○く○

夫○れ○鰭○を○濫○觴○に○擧○ぐ○る○も○の○は○曾○て○千○里○の○鯤○を○見○る○に○由○な○し○關○を○  
藩○離○か○き○に○翫○つ○も○の○は○何○ぞ○よ○く○九○萬○の○鵬○あ○る○こ○と○を○知○ら○ん○是○の○故○  
に○海○上○の○頑○人○は○魚○の○如○き○木○あ○る○こ○と○を○疑○ひ○山○頭○の○愚○士○は○木○の○如○き○  
魚○あ○る○こ○と○を○怪○む○則○ち○知○り○ぬ○離○朱○が○明○に○あ○ら○ざ○れ○ば○毫○末○を○見○る○に○  
人○無○く○子○野○が○聰○に○あ○ら○ざ○れ○ば○何○ぞ○よ○く○鐘○の○響○き○を○別○た○ん○杏○呼○見○る○  
と○見○ざ○る○と○愚○と○愚○な○ら○ざ○る○と○何○ぞ○夫○れ○遙○に○隔○る○や○吾○汝○等○が○論○を○聞○

くに、譬へば氷に鑊め、水に畫くが如く、勞ありて益なし、何ぞそれ劣な  
るや、龜毛が鳧脚は未だ短しとなす可からず、隱士が鶴足は長しとな  
すに足らず、汝等未だ覺王の教、法帝の道、佛教をいふを聞かざるか、吾  
當に汝等が爲に略綱目を述べ可し、宜しく秦王の僞りを顯はす鏡に  
鑒みて、早く葉公が眞を懼るゝの迷を改め、俱に觸象の醉を醒して並  
に師吼の道を學す可し、儒童迦葉は並に是れ吾が朋なり、汝が冥昧を  
惑んで吾が師先づ遣はす、然れども、機の劣なるに依りて、淺く二儀の  
膚を示して未だ十世の理を談せず、各殊なる途を執して、争うて旗鼓  
を擧ぐ、豈迷へるにあらずや、

隱士答へて曰く、

吾熟々公を視るに世の人に異り、頭を視るに一毛なし、體を視る  
に多物を持てり、公は是れ何州何縣誰れが子、誰れが弟子ぞ、

假名大に笑うて曰く、

七〇

三界は家なし。六趣は不定なり。或時は天堂を國となし。或時は地獄を家と爲し。或は汝が妻撃となり。或は汝が父母となり。或は波旬魔を師となし。或は外道を友と爲す。餓鬼禽獸は皆是れ吾と汝とが父母妻撃なり。始より今に至るまで曾て端首無し。今より始に至て安んぞ定數あらん環の如くにして四生に擾々たり。輪に似て六道に轟々たり。汝が髪は雪の如くなれども、未だ必ずしも兄たらず。吾が髪は雲の如くなれども、亦弟にあらず。是汝と吾と無始より來更々生れ代々死して轉變無常なり。何ぞ決定一定の州縣親等あらんや。然れども頃日の間利那南閻浮提現世界をいふの陽谷輪王所化轉輪王治下の下玉藻歸る所の島椽樟日を蔽ふの浦に幻の如くに住す。未だ思ふ所に就かずして忽に三八の春秋を経たり。二十四歳の時改訂したれば三八と

いふ

隱士大に驚て曰く、

何をか地獄天堂といふ乎。何爲れを煩しく衆物を持するや。

假名が曰く、

作業(行爲)不善なれば牛頭馬頭自然に涌出して、報ゆるに辛苦を以てす。心を用ふること苟くも善なれば、金闍銀闍倏忽として聚まり、授くるに甘露を以てす。心を改むること既に難きのみ。何ぞ決定して天獄あらん乎。余前には汝が如く迷ひ疑ひき。但頃日の間適良師の教に遇て既に前生の酔ひを醒せり。夫れ我が師釋尊本願尤も深くして、八十の權を現じ、慈悲極り難うして三十の化を示す。時に有縁の衆は龍神をも簡ばす。甘露の雨に沐して枯れ萎めを枝を榮して果を結ぶの期を授く。無福の徒は貴賤を論ぜず。辛晷を知らず。夢溷に沈んで醍醐を

七一

七二  
忘れたり。所以に慈悲の聖帝(釋迦)終りを示せしの日(涅槃)の日(丁寧)に  
補處の儲君、舊徳の曼珠等(彌勒、文珠等)に願命して、印璽を慈尊に授け、  
撫民を攝臣に教ふ。慈尊は彌勒即ち慈氏、攝臣は文珠迦葉等を指す。是  
を以て大臣の文珠迦葉等芳檄を諸州に班ち、即位を衆庶に告ぐ。是の  
故に余忽に檄旨を承はりて、馬に秣ひ、車に脂し、裝束して、道を取る。陽  
陰を論せず。都史の京に向ふ。經途多艱にして、人煙竟に絶えたり。康衢  
甚だ繁くして、徑路未だ詳かならず。一二の從者或は泥中に沈溺して、  
拔出未だ期あらず。或は馬を馳せ、車を奔せて、先ちて已に發進せり。茲  
に因りて、微物を弃てず、子身負擔す。糧絶え、路迷うて、辱く門側に進ん  
て、行路の資を乞ふ。爰に則ち懐ひを述べ、心を策して、無常の賦を賦し、  
受報の詞を顯し、鈴々たる金錫を振ひ、喙々たる玉聲を馳せて、龜毛等  
に唱へて曰く、

熱々爲みれば、峨々たる妙高峯、吻として漢を干せども、劫火に焼かれ  
て灰滅し、浩浩たる溟瀚混漾として、天に沿れども、數日に曝されて消  
竭す。盤礴たる方輿(地)も、漂蕩として、摧け裂けぬ。穹隆たる圓蓋(天)も、灼  
爛して、碎け折れぬ。然れば、則ち寂寥たる非想(天部)も、已に電の激する  
よりも短く、放曠たる神仙も、忽に雷の撃つに同じ。况んや、吾等體を稟  
けたること、金剛に非ず、形を招けること、瓦礫に等し。五蘊虚妄なるこ  
と、水兔(水中の月)の僞借に均し、四大返り難きこと、野馬の倏迹に過ぎ  
たり。二六の縁、十二因縁、意の猿を誘策し、兩四の苦み(八苦)常に心の源  
を惱ます。氤氳たる三毒の燄、晝夜に恒に燔え、鬱蒼たる百八の藪、夏冬  
に尤も繁し。飄埃し脆き體は、機散(人體の機關)散して、死する時(の朝)に  
は、春の華と與に以て、續紛たり。翔風の假の命は、緣離の夕べには、秋の  
葉と共にして、紛紜たり。千金の瑤の質も、尺波に先ちて、黄扉に沈み、萬



乗の寶の姿も寸烟に伴うて立微に厲る。婕娟たる蛾肩も霞を逐うて  
 以て雲閣に飛び的蝶たる貝齒も露に添て咸く零落す。傾域の華の眼  
 は忽爾として綠苔の浮べる澤となり、珠を垂れたる麗耳は倏然とし  
 て松風の通へる壑となる。朱を施せる紅の臉も卒に青蠅の跼蹐と爲  
 り、丹に染めたる赤き唇も化して烏鳥の哺完と爲る。百媚の巧咲も枯  
 れ曝せる骨の中に更に値ふ可きこと難く、千嬌の妙態も腐れ爛れた  
 る體の裏に誰か亦敢て進まん。蛾々たる漆髪は縦横として藪上の流  
 芥となり、纖々たる素手は沈淪して草中の腐敗となる。馥々たる蘭氣  
 は八風に隨て以て飛び去ぬ。消々たる臭液は九竅より沸き舉れり。  
 網繆たる妻孥も楚宋が夢に神女に遇へるに異ること無く、磊砢たる  
 寶藏も宛も鄭交か空しく仙語を承けしに同じ。颺颺たる松風、颺颺と  
 して襟を吹けども、聆て忻ぶの耳更に何れの所にかある。珍瓏たる桂

月可憐として面に映すれども、視て娛しむの心亦何の處にか之きし、  
 乃ち知んぬ颯纒たる羅縠何ぞ愛し喜ぶべき。森萃たる薛蘿此れ常の  
 飾のみ、楮堂聖室は曾て久しく止まること無し。松塚墳墳は是れ長く  
 宿する里なり。琴瑟の孔懐も閔墓の下には相見るに由なし。婉孌たる  
 蘭友も荒墟の側には復談笑の理無し。孤り落々たる松の陰に伏して、  
 空しく樹の邊に滅え、獨り響々たる禽の囀りに伴うて徒に草の前に  
 淪みぬ。蠢々たる萬蟲宛轉として相連り、斷々たる千狗咀嚼して繼ぎ  
 聯れり。妻子は鼻を塞いで以て厭ひ退き、親疎は面を覆うて以て逃れ  
 旋る。嗟呼痛しい哉。百味を食ひし婀娜たる鳳體も徒に犬鳥の屎尿と  
 爲り、千彩を装ひし嬋媛たる龍形も空しく燎火の燃ゆる所となる。誰  
 か春苑に遊んで愁緒を消し、秋池に戯れて以て宴筵を舒ぶべき。嗚呼  
 哀しい哉。潘安が詩を詠じて、彌哀哭を増し、伯姬が引を歌うて還て裂

酷を深うす。無常の暴風は神仙を論せず。精を奪ふの猛鬼は貴賤を嫌はず。財を以て贖ふこと能はず。勢を以て留むることを得ず。壽を延る神丹千兩を服すと雖も。魂を返す奇香百斛を盡く燃くも。何ぞ片時を留めん。誰か三泉を脱れん。尸骸草中に爛れて全き無く。神識釜に煎沸せられて専なると無し。或は巖巖たる刀嶽に投げられ。流血を潺湲たり。或は燐燐たる鋒山に穿たれて胸を貫て愁焉たり。或は萬石の熱輪に轆れ。或は千仞の寒川に投ず。或は鑊湯腹に入り。常に包煎を事とし。或は鐵火喉に流れて。暫くも脱るに縁なし。水漿の食は億劫にも何ぞ稱ふるを得ん。咳唾の食は萬歳にも撞にするを得ず。師子虎狼は屬々として歎び跳り。馬頭羅刹は閃々として相要む。號叫の誓朝な朝な。雲に憩れども。赦寬の意暮な暮な。已に消ぬ。閻王に囑託すれども。惑ひ意戚く銷え。妻子を招き呼へば。既に亦絲無し。珍を以て贖はんと欲すれども。一の瓊瑤無し。逃れ遁れんと欲すれども。城高うして超ゆること能はず。嗟呼。苦しい哉。嗚呼。痛しい哉。誰か鷄鳴の客を覓めて。早く閉關の勞を消し。何ぞ狗盜の子を求めて。克く極刑の刃を拯はん。謀窮まり。途極まりて。千たび悔い。千たび切なり。石磷芥盡て。叫吽を増す。嗚呼。痛しい哉。嗚呼。痛しい乎。吾若し生日に勉めずして。蓋し一苦一辛羅らば。萬たび歎き。萬たび痛むも。更に誰人にか憊らん。勉めよや。勉めよや。是に於いて。龜毛等百斛の酢梅鼻に入て。酸きをなし。數斗の茶蓼喉に入て。肝を爛らす。火を吞むことを假らずして。腹已に焼くが如く。刀の穿つことを待たずして。胸亦割くに似たり。嗚咽悽愴として。涕泣漣々たり。擗踊して地に倒れ。屠裂して天に憩ふ。慈親を喪ふが如く。愛偶を失へるに似たり。一ひは即ち懼れを抱いて。魂を失ひ。一ひは則ち哀を含んで悶絶す。

酷を深うす。無常の暴風は神仙を論せず。精を奪ふの猛鬼は貴賤を嫌はず。財を以て贖ふこと能はず。勢を以て留むることを得ず。壽を延る神丹千兩を服すと雖も。魂を返す奇香百斛を盡く燃くも。何ぞ片時を留めん。誰か三泉を脱れん。尸骸草中に爛れて全き無く。神識釜に煎沸せられて専なると無し。或は巖巖たる刀嶽に投げられ。流血を潺湲たり。或は燐燐たる鋒山に穿たれて胸を貫て愁焉たり。或は萬石の熱輪に轆れ。或は千仞の寒川に投ず。或は鑊湯腹に入り。常に包煎を事とし。或は鐵火喉に流れて。暫くも脱るに縁なし。水漿の食は億劫にも何ぞ稱ふるを得ん。咳唾の食は萬歳にも撞にするを得ず。師子虎狼は屬々として歎び跳り。馬頭羅刹は閃々として相要む。號叫の誓朝な朝な。雲に憩れども。赦寬の意暮な暮な。已に消ぬ。閻王に囑託すれども。惑ひ意戚く銷え。妻子を招き呼へば。既に亦絲無し。珍を以て贖はんと欲すれども。一の瓊瑤無し。逃れ遁れんと欲すれども。城高うして超ゆること能はず。嗟呼。苦しい哉。嗚呼。痛しい哉。誰か鷄鳴の客を覓めて。早く閉關の勞を消し。何ぞ狗盜の子を求めて。克く極刑の刃を拯はん。謀窮まり。途極まりて。千たび悔い。千たび切なり。石磷芥盡て。叫吽を増す。嗚呼。痛しい哉。嗚呼。痛しい乎。吾若し生日に勉めずして。蓋し一苦一辛羅らば。萬たび歎き。萬たび痛むも。更に誰人にか憊らん。勉めよや。勉めよや。是に於いて。龜毛等百斛の酢梅鼻に入て。酸きをなし。數斗の茶蓼喉に入て。肝を爛らす。火を吞むことを假らずして。腹已に焼くが如く。刀の穿つことを待たずして。胸亦割くに似たり。嗚咽悽愴として。涕泣漣々たり。擗踊して地に倒れ。屠裂して天に憩ふ。慈親を喪ふが如く。愛偶を失へるに似たり。一ひは即ち懼れを抱いて。魂を失ひ。一ひは則ち哀を含んで悶絶す。

假名即ち瓶を採り、水を咒して普く面上に灑ぐ頃ありて蘇息し、酔ひに似て言はず、劉石が塚より出しが如く、高宗の喪に遭へるに似たり、良久うして二目に涙を流し、五體を地に投じ、稽顙再拜して曰く、

我等久く瓦礫に翫うて常に微樂に耽る。譬へば辛さを蓼葉に習ひ、臭を厠屎に忘れ、盲目を覆うて以て險道に進み、蹇驚を驚て冥途に向ふが如し。至らん所を知らず、陥らん所を知らず。今偶高論の慈誨に頼りて、我が道の淺膚なるを知りぬ。臍を嚙んで以て昨の非を悔い、腦を碎いて以て明の是を行はん。仰ぎ願くは慈悲の大和上、重て指南を加へ、察に北極を示せ。

假名が曰く、

愈り矣。咨。咨。善い哉。汝等遠からずして還れり。吾今重て生死の苦源を述べ、涅槃の樂果を示さん。其の旨は即ち姫孔(周公孔子)の未だ談ぜ

ざる所。老莊の未だ演べざる所なり。其の果は即ち四果、獨一(聲聞緣覺)も及ぶ能はざる所なり。唯一生十地菩薩漸く優遊する所なるのみ諦に聞き、能く持てよ。要を擧げ、綱を撮て略汝等に示さん。

龜毛等並に席を避けて、稱して曰く、唯唯。心を静め、耳を傾けて忝しく専ら説を仰がん。

粵に即ち心藏の鍵を開き、舌泉の流を振うて、正に生死海の賦を述べ大菩提の果を示して曰く、

夫れ生死の海たる、三有(三界)の際を纏じて彌望するに極りなし。四大の表を帯びて、渺瀰として測る事無し。萬類を吹嘘し、巨億を括搥す。大腹を虚うして、以て衆流を容れ、鴻口を開いて諸沍を吸ふ。陵に襄るの汰洶々として息まず。崎を凌ぐの浪濤々として相逼る。礧々として霆の如くに響いて、日々に已に乘し。鱗々として雷の如くに震うて夜

夜既に充てり。衆物累り積りて、群品夥く聚る。何の怪か育せざらん。何の詭か豊かならざらん。其の鱗類は則ち慳貪瞋恚極大欲あり。長き頭端無く、遠き尾極り莫し。鰭を擧げ尾を撃て口を張り食を求む。波を吸ふ時は則ち離欲の船橋擡け帆匿れぬ。霧を吐く時は、即ち慈悲の舸楫折れ人殛びぬ。且つは泳ぎ、且つは涵て志意式あらず。或は變し、或は餐して、心性直きに非ず。壑の如く溪の如し。後害測られず。鼠の如く蠶の如く隠ふるに非ず。惻むに非ず。共に千劫の蹉跎を忘れて、並に一涯一生涯の貴福を望む。其の羽族は則ち詔証譏諛誹謗麤惡嗜嗜賭博嗜嗽。蓮籛軟語する者。惡作あり。鬪を整へて道に背き、高く翫て樂に赴く。四倒の浦に碎匄として十惡の澤に沸奔す。正直の菱を彫啄し、廉潔の藿を暖噪す。鳳を見、鸞を見て仰いて豫め赫々たり。鼠を撃り、犬を撃て、俯して則ち昨昨たり。且は飛び、且つは鳴いて現前の潤屋を營なみ。或は

痛み或は死して未來の苦酷を忘る。豈知らんや。鴈門の坂には、織羅細網張り列ね昆明の池には、黏微普く設け、更羸が箭は前に來りて首を碎き養由が弧は後へに放ちて血を流すことを。若し其の雜類は憍慢忿怒罵詈嫉妬自讚毀他遊蕩放逸無慚無愧不信不恤邪姪邪見憎愛寵辱殺害の黨鬪鬪の族あり。形を同うし心を異にし、類を別にし、目を殊にす。鋸の爪鑿の齒慈少うして穀を喰す。耽々として虎の如くに視て朝露の釐に遊び、睢々として師の如くに吼えて夜夢の谷に戯る。遇ふ者は氣を奪はれ、精を拔れ、腦を塗れ、腸を碎く。見る者は身慄き心悚れ、瓊々として警伏す。斯の如きの衆類上、有頂天に絡ひ下、無間獄を籠めて、處に觸れ、櫛の如くに比び、浦毎に屋を連ねたり。玄虛が神筆を千たび聚めても陳べ難く、郭象が靈輪萬たび集めても何ぞ論ぜん。茲に因て五戒の小舟猛浪に漂ひ以て羅刹の津に曳々掣々たり。十善の椎輪

強邪に引かれて魔鬼の隣に隠々々たり是の故に、勝心を因の夕べ  
に發し、最報を果の晨に仰ぐに非ずんば、誰か能く森々たる海底を拔  
き、蕩々たる法身に昇らん、誠に須く六度の筏纜を漂河に解き、八正の  
舸棹を愛波に舫し、精進の疆を樹て、靜慮の颯を擧げ、群賊煩惱を拒ぐ  
に、忍鎧、忍辱の鎧を以てし、衆散を威すに、智劍を以てし、七覺の馬に策  
ち、函に沈淪を越す、四念の輪に駕して、高く、鸞座を越ゆ、可し、則ち頂珠  
を許して、以て疆を封せん、こと彼の鶯子、舍利弗、校記の春に同じから  
ん、頸瓔を奉じて、境を盡さん、こと此の龍女、得果の秋に比せん、十地の  
長路、須臾に經、彈し、三祇の遙かなる、劫を究め、圓にせん、こと難きに非  
ず、然して、後十重の荷、十重の障りを捨て、尊位を眞如に證し、二轉、菩提  
涅槃の果の臺に登りて、帝號を常居、法身の居に稱せん、一如眞如、理に  
合うて、心に親疎なく、四鏡智を含んで、遙に毀養を離れん、生滅を越て

改めず、増減を越えて、衰へざらん、萬劫を踰て、圓寂たり、三際三世に亘  
りて、無爲ならん、豈皇ならずや、亦唐からずや、軒帝堯義も、履を探るに  
足らず、輪王釋梵も、輪を扶くるに堪へず、天魔外道百非を、闚ても、毀る  
所に非ず、聲聞辟支萬是を、飛ぶも、是とする所に非ず、然りと雖も、四弘  
未だ極らず、一子衆生溝に沈めり、此を願るに、恨々たり、此を思ふと、丁  
寧なり、爰に更に百億の應化、百億の城に班ち、假に非相に託して、非形  
を示現す、會成の道入相に始り、金山の體、四康四諦の理に坐す、神光神  
使、入荒に驛し、慈悲慈愍十方に頒つ、然て後、萬類萬品雲に乗じ、雲の如  
く、に行き、千種千彙風に、騎り、風の如くに、投るとを待つ、天より地より  
雨の如く、泉の如し、淨より染より、雲の若く、煙の如し、地に下り、天に上  
り、天に上り、地に下る、八部四衆區々に各交り、連れり、讚唱關々たり、鼓  
鶡淵々たり、鐘の如くに、振うて、磬々たり、華の如くに、飄りて、聯々たり、

磷々爛々として震々填々たり目に溢ち耳に溢ち黄に満ち玄に満ち  
 り踵を履み踵を履み脰を側て肩を側て禮を盡し敬を盡し心謹み心  
 専らなり爾して廻ち一音の鸞輪を轉じて心の娘械を摧く大千を拔  
 き拵て他界に投擲ち大山を削らずして小芥に入る甘露の雨を雨し  
 て以て誘ひ以て誠む法喜の食を班て智を韞み戒を韞めり悉く康哉  
 を詠じて腹壞を撃ち來蘇を頌して帝功を忘る無量國の歸溲する所  
 有情界の仰ぎ叢る所なり惟れ尊惟れ長以て都たり以て宗たり咨咨  
 蕩々たらずや大覺の雄巍々たる焉哉誰か敢て比び窮めん此れ寔に  
 吾が師の遺旨如々の少深なり彼の神仙の小術俗塵の微風何ぞ言ふ  
 に足らんや亦何ぞ隆んなりとするに足らん哉

是に於いて龜毛公等一びは懼れ一びは辱ぢ且つは哀み且つは笑  
 ふ舌に任せて俯仰し音を逐うて方圓なり喜歡踊躍して稱して曰く

吾等幸に優曇の大阿闍梨に遇ひて厚く出世の最訓に沐す昔にも  
 未だ聞かず後葉にも豈有らんや吾若し不幸にして和上に遇ひ上ら  
 ずんば永く理欲に沈んで定めて三途に没しなん今僅に提撕を蒙て  
 身心安敞なり譬へば震霆響を發して蟄貶封を開き朝鳥輪を轉じて  
 幽間氷を渙が如し彼の周孔老莊の教何ぞ夫れ偏膚なるや今より後  
 皮を剥いて紙と爲し骨を折て毫を造り血を刺して髓に代へ鬻を曝  
 して研に用ひ敬んで大和上の慈誨を銘して以て生々の航略に充て  
 ん

假名が曰く座に復れ今當に三教を敝にして十韻の詩を以て汝等  
 が謠諤に代へん廻ち詩を作りて曰く

居諸破冥夜 三教寒癡心 性欲有 多種  
 網常因孔述 受習入槐林 轉變聃公授 醫王異藥鍼  
 依傳道觀臨

金仙一乘法	義益最幽深	自他兼利濟	誰忘獸與禽
春華枝下落	秋露葉前沈	逝水不能住	廻風幾吐音
六塵能溺海	四德所歸岑	已知三界縛	何不去纓簪

### 南海の跋渉、近畿東海の歴遊

天風は密雲を拂ひ、雷雨は積暈を洗うた。今や一碧海のやうな心の空には、一點の塵芥を止めぬ、真魚の胸は此に新なる光を仰いだ。西せんか、東せんか、儒に止らんか、佛に歸せんか、彼の心は之れが爲に非常なる苦痛と煩悶とに掻き亂されたが、今や快刀は亂麻を斷ち、明かなる解決を得た。彼は儒佛老の一致を認め、出家の忠孝に背かざるを確め、此に釋然として悟り、其の向ふ所を知つた。彼は大學を辭し、儒冠を脱して、近士となり、佛教に一步を進めた。

前章に於いて、余は弘法大師の一生には逆境がないと説いた。併しながら是れは比較的の話である。固より日蓮上人等に比すべきではないが、而も精神上の苦悶苦闘は甚しいものがあつた。故に若し之をも逆境といふことが出来るならば、彼も亦多大の逆境に處し、難關を透破し來つた人といはねばならぬ。而して出家の際の煩悶の如きは恐らく其の大なるものゝ一であらう。

斯くの如くにして、彼は飄然として、京師を去り、江海を渡つて、鄉國南海に還り、四方の山岳深溪を跋渉し、以て不平煩悶の氣を掃はんとした。由來南海の地は幽邃を以て鳴つてをるので、今や十九歳の青年は到る處に、天來の妙音に接し、宇宙の靈氣を呼吸して、乾坤を叱咤し、天地を吞する底の英氣を涵養したであらう。彼は何處から何處に向つて如何に跋渉したかは明に分らぬので、諸傳一として詳細を傳へてをらぬ。而も

阿波の大瀧嶽に登ったこと、土佐の室戸崎に遊んだこと、は諸傳の  
 皆一致する所である。想ふに彼は南海四州の名山大澤は概ね之を究め  
 之を踏破したに違ない。彼自ら三教指歸の序に於いて、是に於いて、大聖  
 の誠言を信じて、精進勉勵し、阿波の大瀧嶽に攀ぢ、土州の室戸崎に勤念  
 す。谷響きを惜まず、明星來影すと誌して居るのを觀ても、如何に彼が山  
 岳嵩高の境に嘯いたかゞ分るであらう。従つて、諸傳或は大瀧嶽に於い  
 て、毒龍を退治し、室戸崎に於いて、明星來つて口に入つた等の神怪なる  
 傳説を載せてをる。是れは如何でも好いとしても、彼が四國南海の跋涉  
 に依つて、其氣宇を盛んにし、其の英氣を養ひ、以て、他日の準備をなした  
 ことだけは之を特筆せねばならぬ。

阿波の大瀧嶽は幽溪相臨み、鬱蒼たる碧樹雲霧を含ひ、靈山である。麓  
 に巖洞があつて、山容孤秀、前壑は壁のごとく削つて、南捨身と呼ばれ、後

壑は石筍の如く危うして北捨身と稱せらる。北捨身の上部は裂けて  
 銳稜をなし、威容甚だ崇嚴、嶽の南に須彌山が聳えて、古木蒙密、龍窟不動  
 窟、鐘窟、正地窟の四窟がある。彼は此に於いて、天風を聽き、白雲を望み、其  
 の志氣を鼓舞したことは非常であつたであらう。殊に土州の室戸崎は  
 南溟の暖潮遠く臺灣琉球の邊から來つて、薩の南端を洗ひ、日の背面を  
 衝き、汪洋として本洲に向つて湧き來り、遠く龍のごとく横る室戸の岬  
 巖を目かけて、九海の潮を傾けて襲ひ來る壯觀實に言語筆舌の盡す所  
 ではない。見渡せば、豊日の山影黛を描いて、依稀として一髮の碧を凝し、  
 近くは岬角に亂る大渦、小渦、車輪の如く旋轉して、鮫鯨出沒し、滿浦の  
 千松萬里の潮風に、謖々の聲をなす。想像の翼を放つただけでも、神逝  
 き魂驚く底の偉觀である。况んや三更人静り、萬籟死するの時、仰げば、碧  
 落の星斗燦爛として、天門を護り、滿目の海氣、大虛を憾して、海潮の音微



九〇  
に遠雷の響を送る時巖々たる石上に結跏して瞑目一番大死底の三昧に入つたならば神祕幽妙の消息は實に察するに餘りあるのである。我は生命ある宇宙の一塵か生死を逸出したる御風の神仙か佛か魔か意識の大灘波穩にして宇宙の森嚴胸奥を壓し來るとき彼か是れか是か彼か渾融冥合身は六合寂靜の海に融けて蕩々たり悠々たり乾坤に獨歩し三界に逍遙する底の趣きがあるてあらう。谷響きを惜まず明星來影すとは描き得て真相を傳へてをる。彼は斯くの如くにして森林に瞑想した印度の古聖の如く真我の光を握り實相の奥に徹したに相違ない。大いなる哉室戸の山偉なる哉冥想裏の天地。

彼は斯くの如く南海の山水に放浪したばかりでなく更に近畿東海の天をも跋涉したと傳へられてをる。而も惜いかな其の間の消息が分らぬ。恐らくは内海を渡つて山陽に行き夫れより近畿に遊び更に東海

に赴いたてあらう。今處々に遺蹟を傳へてをるが果して當時のものであるや否やは明かでない。但し伊豆に至るまで其の足跡を印したことは事實であらう。今に修禪寺は其の禪定の跡と傳へてをる。かくて彼は悠遊一年再び飄然として京師に還つて來た。想ふに三十六峰の青巒更に碧を凝して新英の俊兒を迎へ北嶺の天颺白雲を送つて滿袖の客塵を拂つたてあらう。

### 勤操の門に歸る

雪は比良の一角に残つて春風蓬阪山を躑え滋賀の浦曲の花吹雪潮を埋むる頃は東山より鴨の河原の花も綻び大和和泉の霞も濃くなり三輪初瀬の陽炎燃えて地は到る處に新なる喜びの色を飾つた。天の驪び地の傲り丘の若松聲を揃へて精舎の壁に香煙緩に立繞る

九二  
閑長、眞魚は今年二十の春を迎へて、年來の希望を遂げ、此に和泉の國  
槇尾山寺の淨苑、勤操僧都の室に入り、落飾して、沙彌戒を受けた。

南海の山、東海の海水に洗つた清き心と清き身は、此に恩師の下に歸  
つて、愈佛陀の門に入つたのである。彼の喜びはどうであつたらうか。追  
懐は苦しい夢の跡を示して、其煩悶の幾歲月としづきを顧みたらば、恐らくは  
隔世の感があるであらう。かくて名を教海と改め、次いで如空と改め、翌  
年更に空海と改めた。

彼が後世幾百載の人の心に刻まるべき空海なる名に改めた歳は實  
に國史上逸すべからざる重要な歳であつた。他なし。此の歳は即ち延  
暦十三年で、桓武天皇は都を山背に遷し給うたのである。平安の奠都！  
奠都と共に宗教藝術の氣運は、益動搖し來つて、新興の氣が溢れて來た。  
明年蝦夷を破り、太平の象洋々として湧く時、彼は南都東大寺の戒壇院

に於いて、具足戒を受け、此に愈一個の大僧となり了つた。

抑、槇尾山寺は欽明天皇の御願に依つて、行滿上人開創し、千手觀音の  
靈像を安置し、四民渴仰の梵刹となつた。有名な淨境である。見渡せば、裏  
山かけて、幾百歳の老樹、綠葉を裝ひ、朝じめりする森の香に、太古の様も  
偲ばるゝのである。空海は幽谿花遲き南院の下に、或は經卷を繕いて、大  
聖古哲の跡を釋ね、八不中道の空觀に入り、或は鑿を溪水に磨いて、白檀  
に向つて、一刀三禮の技を鍛うた。彼が後に藝術の苑にも、亦た優妙なる  
韻を傳ふることが出來たのは、槇尾の閑日月が與つて力あつたのであ  
る。而して、彼が師と頼み、父と禮した勤操僧都とは如何なる人であらう  
か。

僧都の傳は元亨釋書、東國高僧傳等の語るところに依れば、俗姓は秦氏、  
天平寶字二年大和高市郡に生れ、十二歳にして、南都大安寺の信禮を師

とし、初めて佛門に入つた。かくて、十六歳の時、潜に高野の幽谷に隠れて、観念修禪に思ひを凝したが、老母の招くに會うて、東大寺に遊び、善議法師に就いて三論を受けた。次いで、學德漸く世に聞え、神護景雲四年には、宮中及び山階寺に一千僧を度し、弘仁元年には、大極殿に於いて、最勝王經を講じ、名聲益高く、宮中に於いて、諸宗對論があつた時には、座主に選ばれ、僧都を加へられた。かくて、東大寺を兼營し、淳和天皇更に西寺に主らしめ給うた。後石淵寺を開き、始めて法華八講を興したので、世に石淵八講の名がある。三論の名僧で、天長二年には大僧都に進み、同四年の五月七日滿山の青嵐空鐸を吹く西寺の北院に寂した。享年七十、亦一代の龍象であつた。

空海は此の名僧を師として、三論の研究に心血を灑いだ。三論宗とは龍樹菩薩の中論及び十二門論と提婆論師の百論の三部の論に基いて

宗を立てたから、此の名があるので、龍樹の大智度論を別論とし、般若部の經典を所依として、眞理は言詮思議の及ぶ所にあらず空なりと説く一宗で、眞理超認識説を唱ふるのであるが、支那に於いては、姚秦の時、羅什が以上の四論を譯して、之を講じ、隋の時には、嘉祥大師吉藏が疏を作つて、盛に之れを鼓吹し、我が國では、推古天皇の三十三年、高麗の僧慧灌來朝し、勅に依つて南都元興寺に居り、後河内の井上寺を創め、三論を擴めた。彼は固高麗より隋に入り、嘉祥の門に列つて、三論を受けた名匠である。慧灌に次いで、同じく嘉祥門下の吳僧智藏我が國に來り、三論を説き、法隆寺に住し、白鳳二年に僧正に任ぜられた。慧灌智藏の二師は日本三論の祖で、是れより三論は南都京畿の間に擴まり、法相宗と覇を争ひ、謂はゆる南都六宗の精髓となつた。

空海は勳操の門にあるので、三論を専攻したには相違ないが、而も、當

時佛教の狀態を考ふるに、南都の佛教は六宗と宗別はあるが、後代の宗派の様に動かすべからざる教權未だ確立せず、寧ろ學問的智解的の宗教であつた。故に學僧は彼に往き是に就き、二宗三宗に亘り、學匠講師も教宗を兼學してゐる者が多かつた。是に依つて考るに、空海の鋭才を以つてして、三論の關外に出てなかつたとは思はれぬ。恐らく、彼は法相華嚴を始め、其他の諸宗の堂奥に向つて、渾身の精力を傾けたであらう。斯くの如くにして、彼の學徳は日々に進み、延暦十六年二十四歳の冬には、十九歳の時の舊作を訂正して、三教指歸三卷を公にしたことは既に述べた通りである。三教指歸は南都の學僧之を讀まぬものなく、彼の盛名は隆々として六宗學苑の間に高まつた。而して、翌十七年には阿波に往き、大龍寺の創立に與り、幾多の佛像を刻んだと傳へられてをる。大龍寺は桓武天皇の勅に依つて、國司藤原文山の營むところて、南海の名刹

である。

### 大日經の感得

朝に三論を繙き、夕に唯識を讀み、佛陀正覺の跡をたれば、迎る程疑惑の雲が胸中に蟠つて來る。三論の空觀幽は即ち幽であるが、彼を満足さするには餘りに空であつた。唯識華嚴の理密は即ち密であるが、彼を喜ばずには餘りに理に落ちて居た。其他俱舍成實律の諸宗に於いても、彼は満足を見出さなかつた。

彼は斯くの如く、多くの名論廣經に於いて、其の求むるところを探したが、希望の光は益薄るゝばかりで、智解難澁の理に於いて、究めざる所はないが、而も靴を隔つるの感を免れない。嗚呼、妙なる哉、宇宙神なる哉、人生智解の刃は鋭いが、神祕の關門を闢くには餘りに弱すぎる。幽妙な

る眞理の國は徒に認識の鍵のみでは餘りに迂遠である。三論法相華嚴の學匠に取っては宇宙は可解であるかも知れぬ。人生は既決であるかも知れぬ。併しながら彼に取っては宇宙は幾億載の古から未だ解かれざるスフィンクスの謎である。人生は若々しい血潮の中に漂ふてをる未決の一塊である。内容なき知解は如何して生命ある解決を與ふることが出来よう。

彼は忍冬かをる禪院の奥に思ひを凝した。

嗚呼實相と萬法……

佛陀と衆生……

是れ千聖の等しく迷ふ萬古の疑問ではないか。實相(實體)と萬法(現象)。佛陀(覺)と衆生(迷)とは果たして如何なる關係があるであらう。俱舍の説くが如く萬法は悉く實在であらうか。法相の示すやうに森羅の諸法は

心海の泡瀝に過ぎぬであらうか。彼に歸せんとすれば主觀の權威を如何にしよう。是に服せんとすれば客觀の要求を如何にしよう。或は相即渾融十玄六相の門を開いて主客兩觀の兩面を攝しようか。美は即ち美、幽は即ち幽であるが、唯是れ智解の沙上に描かれた樓閣ではないか。長生殿上の金獅子重々無盡の光を放つてをるが要するに斧鑿の跡を免れない。染淨浪絶の一心微を立て、妙を示してをるが言詮上の遊戯三昧に墮しはしまいか。我が求むるところは生命の泉である。活きたる宇宙の脈搏に觸れずんば、百の比量推理も千の解釋も空華にすぎぬ。

宇宙は活きてをる呼吸してをる。此の生命に依つて花は丘岡に笑み、水は溪谷に叫いてをる。宇宙は知解のみの對象たるには餘りに温かである。深更人靜つて、碧落獨り醒むるの時、仰いて彼の星辰の燦たるを觀よ。太白北斗渾沌未剖の古へから、其の道を守り、其の軌を違へず。年々日

一〇〇  
夜に旋轉して居るではないか。嗚呼妙なる哉。自然の巨律、四時行はれて萬物育す。美なる哉。天門の宏圖、陰陽交錯して、萬象形を賦す。宇宙は活きてをる。宇宙は呼吸してをる。此の呼吸に觸れ、此の生命に徹せんが爲には、全意識、全肉體を提げて、彼の一關に抛つ。の覺悟を要する。斯くの如くにして、始めて新なる光を認むることが出来るのではあるまいか。

傳ふるところによれば、彼は二十三歳の時、東大寺毘盧遮那佛の御前に跪いて、更に新なる經文を得させ給へと祈禱したといふ。斯くて彼は偶然にも、大日經の我が國に渡來しをることを確めたが、而も、何處に收めてあるかは明かでない。彼は此に於いて、専心大日經の探求に心を砕いた。

彼は大日經を求めんとて、東西に奔走したが、其の功がなかつた。彼が勤操の門に還つてから、入唐するに至る十年間は、諸傳之を誌すこと、甚

だ簡であつて、其の如何なる生活をなし、活動をなしたかは明かでない。想ふに、此の十年の間に、彼は異日活躍する準備をなして居たのであらう。而して一方大日經の探求に腐心して居たと共に、他方には、靜に彫刻、繪畫の藝苑に心を澄して居た。彼が書に於いて、繪に於いて、將亦彫刻に於いて、曠世の靈腕を有するに至つたのは、此の準備時代の修養が、其の根柢をなしてをる事は、疑ひを容れぬ事實である。然らば、幽谷十年の雌伏は、我が文明史上に幾多の光彩を添へんが爲に、彼に與へられた閑日月である。吾人は彼の光榮ある傳記の精彩は、此間から發し來ることを忘れてはならぬ。

彼は藝術に心を傾くると共に、自然に悠遊することをも怠らなかつた。恐らくは、是れ大日經探求の目的を以つてなされた旅行であつたであらう。或は、金剛山の青嵐に嘯いて、攝河の野を瞰み、或は、山上、紀伊の諸

一〇二  
險を攀ぢて、神杉陰深き五十鈴川畔の大廟に古書舊録を訪ね、或は葛城の雲氣を吸うて、深邃の奥に遊び、或は吉野の花を探り、或は遠く石峰雲邊の諸嶺を跋涉して、浩然海濶の氣象を養うた。此の間に彼の甥に當る智泉は彼を師と禮して佛門に歸した。時に歳僅に十三の少年であつた。智泉は後に空海門下の顔回となつた俊兒である。

大日經の傳來については異説紛々として決し難い。或は譯者善無畏自ら之を携へて、神龜五年に我が朝に傳へたといひ、或は西大寺の德誠法師入唐して、善無畏に受け、歸朝の時將來すと稱し、何れが是なるか未決の問題である。併かしながら、空海以前に傳はつて居た事は事實である。空海が大日經の探求に志してから、十年の歲月空しく逝いたが、或る機會から、久米寺に同經の傳はつて居る事を聞いて、同寺に至り、限なく求めたが、更に何處に藏つてをるか分らなかつた。そこで彼は佛前に誠

心を抽んで、祈請を凝し、漸くにして、東塔大柱の下に於いて、一部七卷を發見したと傳へてをる。

嗚呼十年の苦心、十年の探求、彼が此の時の喜びは果して如何であつたらうか。雀躍して佛天の加護を謝したてあらう。時に歳正に三十。

### 入唐求法

空海は久米寺の塔下に、大日經を得、日夜熱誠を捧げて、奥義を究めんとしたが、甚だ難解で透徹せぬところがあつたので、當時支那に於いて密教の隆盛を聞いた彼は遊心勃如として禁じなかつた。時なる哉。遣唐使派遣の事があつたので、機逸す可からずとし、恩師勤操僧都の推舉に依つて、此に入唐求法の勅許を得て、道を萬里の外に求むるの好運に接した。

彼が入唐前後の事情に關しては是れ亦異説紛々たる有様で今日より其の真相を求むることは甚だ難いが、要するに、勤操の推舉を経て便乗を許されたと見るが穩當であらう。彼は海上の安全を祈るために、般若心經一百卷を寫し、手づから薬師如來の像を刻んだ。加之、紀念として、等身の自像を畫いて遙に郷里なる老母に贈った。今讚州善通寺にあるものが是れといふことである。

其の時の遣唐使の一行は從四位上藤原葛野麿を大使とし、副使從五位上石川道益以下の朝臣で、延暦二十二年の四月に節刀を賜ひ、同十四日に難波の浦から出帆したが、暴風に遭うて一先づ引返し、翌年の六月一日出發、一行は宇佐八幡宮に詣て、海路の安全を祈請し、空海は前に述べた心經を奉納し、薬師佛を携へて、七月六日肥前の松浦から北に向った。一行四船に分乗したが、一行中我が國の文藝宗教史上に忘るべか

らざる三人の英傑があつた。即ち書に名高き橘逸勢、日本天台の開祖となつた最澄、及び空海、其の人である。然るに、中途で暴風の襲ふところとなり、第一第二の兩船のみが目的を達し、第三船は引返し、第四船は行衛不明となつた。而して八月十日正副兩使、及び空海等は福州に著し、越えて九月一日最澄等は明州に著いた。

然るに長安入京について、二三の紛議を生じたが、少時して、入京の許可を得た。此の時空海は正使の囑に應じて一書を福州の刺史に贈り、入京の件について、頗る周旋するところがあつた。加之、又私書を裁し、求法の志を陳べて、自己の入京を請うた。其の文は彼の文集、性靈集の中に遺つてをる。文に曰く、

日本國留學の沙門空海啓す。

空海才能聞えず、言行取るところなし。但雪中に肱を枕とし、雲峯に菜



を喫ふのみを知れり。時の人に乏しきに逢うて、留學の末に筵まじれり。限るに二十年を以てし、尋るに一乘を以てす。任重く、人弱くして、夙夜に陰を惜む。今使に隨ひて入京を許されざることを承く。理須く左右すべくんば、更に求むる所なけん。然りと雖も、居諸駐らず。歳は我と與ならず。何を厚く國家の憑を荷うて、空しく矢の如き序を擲つことを得んや。是の故に斯の留滯を歎きて、早く京に達せんことを貪る。伏して惟るに、中丞閣下、德天心に簡り、仁遠近に普し。老若袖を連ねて德を頌すること路に溢れ、男女手を携へて、功を詠ずること耳に盈てり。外には俗風を示し、内には眞道を淳たかふ。伏して願くは、彼の弘道を願て、入京を得しめよ。然れば則ち早く名德を尋ねて、速に志す所を遂げん。今願の至りに任へず。敢て視聽を塵ちかす。伏して深く戰越す。謹んで、奉啓以聞し謹んで啓す。

貞元二十年十月 日

日本國學問僧空海啓す

中丞閣下

斯くて、空海は遣唐使の一行に隨うて、滿朝歡呼の中に長安に入つた。時に歳時に暮んとする臘月の二十三日であつた。

斯やうにして、彼は愈入唐の志を果した。而して、當時長安は密教が盛んであり、名僧智識も多かつたが、就中、慧果和尚の學德が全都に轟いて居た。此に於いてか、豫て大日經に心を寄する彼は、大いに喜んで、慧果和尚の棲院なる青龍寺に赴いて、其の門を叩いた。

慧果和尚に謁す

空海の志は大であつた。彼は密教を受くるために二十年の在唐を期

した。彼は、大日經の爲に身命を捧ぐるの覺悟をなして居た。時に歳三十一であつたので、彼は五十歳迄長安の天地に其の身を托する考へてあつた。此の燃ゆるが如き熱心の前には、何物か融鎔せぬ物があらう。此の堅忍不拔の金剛心に遭うては、何物か碎けぬものがあらう。彼は實に是の如くにして、黃海を渡り、支那海を越え、西の方長安文化の中圈に入つたのである。斯くて彼は、橘逸勢と共に、西明寺に寓して、全都の高徳を歴訪した。

前にも少しく述べたやうに、密教は龍樹以後、善無畏、金剛智、不空等の三藏に依つて支那に流注し來り、玄宗の歸依を受けたので、教勢旭日の如く、忽ち唐に傳播し、殊に長安に其の盛觀を恣にするに至つた。青龍寺の慧果和尚は、法を不空に受けた高僧で、當時密教の牛耳を執つて居た大才であつた。従つて、青龍寺は長安密教の根本道場となり、四方の龍鳳

悉く其の門に集まつて居た。就中、辨弘、惠日、惟上、我圓、智璿、玫、臺、操、敏、堅、通、義明等は、鐵中の鏘々たるものであつた。加之、當時は支那四千載の文化史上空前絶後の美を競うた時代の後で、文藝の士、詩歌の客、到る處に詠唱和し、文物典章燦爛として、眼を射る程であつた。即ち謂ゆる盛唐の時代、李白、杜甫の後を受けてをるのを想見したならば、其の一斑を察することが出來よう。

今や、長安の街上、煙柳雨に霞み、宮臺樓觀、中空に聳え、滿院の春雨、蕭々として、杏花、蕾を破るの頃となつた。空海は、諸寺の高徳を歴訪して、青龍寺に及び、此に慧果和尚に見えたが、和尚は遠來の孤客を遇すること甚だ深切で、我れ汝を待つこと久し矣と喜んだ。

空海は和尚に就いて、眞言密教の奥旨を叩き、多年の疑問を解いた。和尚は空海の偉器なることを認め、蘊蓄を傾けて、此の新來の弟子を導い

た。當時和尚門下の俊才は雲の如くであつたが空海の偉大なる人格と深遠なる學識とは、遠く彼等に踰え、堂々として其の間に活歩し、嶄然として頭角を露はした。斯くて其の年の夏六月十三日胎藏界の加持をうけ同じく七月金剛界の壇に登つて、丹青を凝し修行全く成就して、遍照金剛の號を授けられたのが八月であつた。此の日大齋會を設けて得道を祝した。

空海は青龍寺慧果和尚の指導を受くること一年許であつた。彼は多くの經典を開いて、益深く眞理の光を求めた。和尚は非常な親密を以つて彼を保護し、彼に便宜を與へ、且つ密教の事相即ち儀軌儀禮は唯口舌を以つて傳ゆることは難いので、多くの佛工佛師に命じて、圖畫形象を作らせて、之を空海に傳へた。空海は纔に一年許の間に、密教の蘊奥を究めた。

然るに、不幸なことが起つた。運命の神は彼に微笑をのみ示さなかつた。其の年十二月十五日月光正に清き時、恩師慧果和尚は青龍寺に於いて、端然として、寂靜海に歸した。是より先、和尚は彼を招きて、汝宜しく日本に密教を弘通すべし、謹みて努力せよ、と密教弘通を附囑した。斯る偉大にして親のやうに愛撫を垂れた師を失つたので、空海は非常に之を悲み、先師を追懷し、墓碣を建て、哀悼の意を表した。其の文に曰く、

俗の貴ぶ所は五常にして、道の重んずる所は三明なり。惟れ忠、惟れ孝、聲を金版に彫り、其の徳天の如し。蓋ぞ石室に藏れん。嘗試に之を論ぜん。滅せざるものは法なり。墜ちざる者は人なり。其の法誰れか覺れる。其の人何にかある。爰に、神都青龍寺東塔院の大阿闍梨法諱慧果和尚といふ人あり。大師掌を法城の行崩に拍ち、迹を照應の馬氏に誕す。天精粹を縦し、地神靈を治く。種は惟れ鳳卵、苗は而も龍駒なり。高く翔

りて木を擇び、葦塵の網之を羅すること能はず。師歩して居を占む。禪林の葩實に是れト食せり。遂に乃ち故諱大照禪師に就いて、之を師とし、之に事ふ。其の大徳は則ち大興善寺の大廣智不空三藏の入室なり。昔髮鬣の日、師に隨ひて三藏に見ゆ。三藏一たびみて、驚異して已まず。竊に之に告げて曰く、我が法教は汝其れ之を興さん也と。既にして之を視る事父の如く、之を撫する事母の如く、其の妙蹟を指して、其の密藏を教ふ。大佛の頂大隨の求、耳を経て心に持し、普賢の行、文珠の讚、聲を聞きて口に止む。年救蟻に登りて、靈驗處々に多し。時に、代宗皇帝之を聞しめして、勅有りて迎入す。之に命じて曰く、朕疑滯あり。請ふ爲めに之を決せよ。大師則ち法に依りて、呼召して紛を解くこと流るゝが如し。皇帝歎じて曰く、龍の子は少しと雖も、能く雨を降らすことを解す。斯の言虚しからず。左右紳に書せども、入瓶の小師子に今に見る矣。

爾りしより已還、驥驎迎送し、四事缺けず。年進具に満ちて、孜孜として雪に照す。三藏の教海唇吻に波濤し、五部の觀鏡機に隨ひて卷舒し、洪鐘の響器を逐うて行藏す。始めには即ち四分法を乗り、後には則ち三密灌頂す。彌の辨鋒も刃を交ゆること能はず。炎轡の智象も誰か敢て底を極めん。是の故に、三朝之を尊んで以て國師となし、四衆之を禮して、以て灌頂を受く。若し乃ち早魃葉を焦す時は、那伽を召して以て滂沱たらしめ、商羊堤を決する時は、迦羅を駈りて、以て杲々たらしむ。其の威暑を移さず。其の驗掌にあるに同じ。皇帝皇后其の增益を崇め、瓊枝玉葉其の降魔に伏す。斯れ乃ち、大師慈力の致す所なり。縦ひ、財帛軫を接し、田園頃を比すれども、受くるありて貯ふることなく。資生を屑とせず。或は大曼荼羅を建て、或は僧伽藍處を修す。貧を濟ふには財を以てし、愚を導くには法を以てす。財を積ざるを以て心となし、法を悛

ざるを以て性と爲す故に若くは尊若くは卑虚うして往て實にして  
 歸り近きより遠きより光を尋て集り會することを得たり矣。訶陵辨  
 弘は五天を経て接足し、新羅の惠日は三韓を涉りて頂戴す。劍南には  
 則ち惟上、河北には則ち義圓、風を欽して錫を振ひ、法に渴して笈を負  
 ふ。若復卯可紹接は義明供奉其の人なり。不幸にして車を求むれば滿  
 公之に當れり。一子の願に沐して、三密の教を蒙る。則ち智瓌、玫堂の徒、  
 操敏堅通の輩並に皆三昧耶に入りて瑜伽を學し、三祕密を持ち毗鉢  
 に達せり。或は一人の師となり、或は四衆の依となり、法燈界に滿ち、流  
 派域に遍し、斯れ蓋し大師の法施なり。親を辭して師に就き、飾りを落  
 して道に入りしより、浮囊他に借らず、油鉢常に自から持せり。松竹其  
 の心を堅くし、氷霜其の志を瑩く。四儀肅まざれども成り、三業護らざ  
 れども善し。大師の尸羅此に於て美を盡せり。寒を經暑を經れども其

の苦を告げず。飢に遇ひ、疾に遇へども其の業を退けず。四上持念すれ  
 ば、四魔降を請ひ、十方結護すれば、十軍面縛す。能く忍び、能く勤むるは  
 我が師の讓らざる所なり。法界宮に遊て、胎藏の海會を觀じ、金剛界に  
 入て、遍智の麻集を禮す。百千の陀羅尼之を一心に貫き、萬德の曼荼羅  
 之を一身に布く。若くは行、若くは坐、道場即ち變ず。眠りに在り、覺に在  
 るも、觀智離れず。是を以て、朝日と與にして、長眠を驚かし、春雷を將て  
 久蟄を抜く。我が師の禪智妙用此に在り。榮貴を示して、榮貴を導き、有  
 疾を現じて、有疾を待つ。病に應じて、藥を投し、迷を悲んで、指南す。常に  
 門徒に告げて曰く、人の貴きは國王に過ぎず。法の最なるは密藏に如  
 かず。牛羊に策て道に赴く時は、久うして始て到り、神通に駕して跋涉  
 する時は、勞せずして至る。諸乘密藏と豈同日にして論ずるを得んや。  
 佛法の眞髓要妙斯にあり。無畏三藏王位を脱躡し、金剛親教は盃を浮

一六六  
べて來傳す。豈徒然ならんや。金剛薩埵稽首して寂を拉きしより、師々相傳して今に七葉なり矣。冒地の得難きに非らず。此の法に遇ふことの易からざるなり。是の故に、胎藏の大壇を建て、は、灌頂の甘露を開く。期する所は若くは天、若くは鬼、尊像を觀て垢を洗ひ、或は男或は女、法味を嘗て、珠を蓋ひ、一尊一契は證道の徑路、一字一句は入佛の父母なる者なり。汝等之を勉めよ。之を勉めよ。我が師の勸誘の妙趣此にあり。夫れ一明一暗は天の常乍に現じ乍に決するは聖の權なり。常理は尤ち寡く、權道は益多し。遂に乃ち求貞元年歲乙酉に在り、極寒の月満を以て、住世六十、僧夏四十、法印を結んで攝念す。人間に示すに薪の盡くるを以てす矣。嗚呼哀しい哉。天歲星を返し、人惠日を失ふ。筏彼岸に歸しぬ。溺子一なり。何かせん。悲しい哉。醫王跡を匿す。狂兒誰に憑りてか。毒を解かん。嗚呼痛しい哉。日を建寅の十七に簡んで、壁を城郭の九

一七七  
泉にトす。腸を斷ちて玉を埋め、肝を爛らして芝を焼く。泉扉永く閉ぢて天に懇ふれども及はず。茶蓼嗚咽して火を吞んで滅ぜず。天雲陰々として悲色を現し、松風廳々として哀聲を含めり。庭際の篔竹葉故の如く隴頭の松檟根新に移る。鳥光激廻して恨情切なり。蟾影斡轉して攀擗新なり。嗟呼痛しい哉。苦を奈何せん。弟子空海桑梓を觀れば、則ち東海の東行李を想へば、則ち難中の難なり。怒濤萬々雪山幾千來ると我が力に非ず。歸らん事我が志に非ず。我を招くに鈎を以てし、我を引くに索を以てす。舶を泛べて朝には數異相を示し、帆を歸すの夕には縷しく宿縁を説かん。和尚掩色の夜境界中に於いて、弟子に告げて曰く、汝未だ吾と汝と宿契の深きことを知らざるか。多生の中に相共に誓願して、密藏を弘演し、彼此代る代る師資となること一兩度のみに非るなり。是の故に、汝が遠涉を勸めて、我が深法を授く。受法云に畢

一〇八  
 り。吾が願足んぬ矣。汝は西土にして我が足を接す。吾東生して汝が室に入らん。久しく逗留すること莫れ。吾れ前に在て去らん。竊に此の言を顧みるに、進退我が能くする所に非ず。去留我が師に隨ふ。孔宣は怪異の説に隨ひと雖も、而も妙幢は金鼓の夢を説く。所以に一隅を擧て、同門に示すもの也。詞は骨髓に徹し、誨は心肝に切なり。一たびは喜び、一たびは悲み、胸裂け、腹断えぬ。罷んと欲して能はず。豈敢て韞默せんや。我が師徳の廣さに憑ると雖も、還て斯の言の地に隨はん事を恐る。彼の山海の變じ易きを歎きて、之を日月の不朽に懸く。乃ち銘を作りて曰く、

生地無邊 行願莫極 麗天臨水 分影萬億  
 爰有挺生 人形佛識 毗尼密藏 吞併餘力  
 修多與論 牢籠胸臆 四分求法 三密加持

國師三代 萬類依之 下雨止雨 不日即時  
 所化緣盡 怕焉歸真 惠炬已滅 法雷何春  
 梁木摧矣 痛哉苦哉 松檟封閉 何劫更開  
 當時の文章の常として、修飾に過ぎた處もないが、其の師を思ふの狀語句の間に溢れて、涙漣々として下る底の眞文である。彼は師を失うてから、諸方の高僧を訪ねて益を請うた。即ち醴泉寺の般若三藏、牟尼室利三藏、會稽の神秀等、其の主なるもので、殊に般若三藏に新華嚴、其の他の梵本を受けた。晉に佛教に止らず、繪畫彫刻、書法、文章、詩律、音韻等の諸學をも修めた。殊に彼は能書の譽を唐都に遺したと傳へられてゐる。  
 嗚呼。師は逝き給うた。訪ふべき人は既に訪うた。叩くべき門は既に叩いた。初めは二十年の在唐を期したが、今や歸つて先師の附囑を故國に

施すべき時となつた。彼は匆々行李を收めて、元和元年の夏、長安を後にした。時に滿都の道俗別離を惜んで、送別の詩篇山をなした。彼は斯くの如くにして、恩師の道を傳へんが爲に、恩師の墓國を去つた。

### 歸朝と密教弘通

元和元年即ち我が大同元年八月明州を解纜して、十月無事博多に著し、二十二日上表して歸朝を奏した。斯くて、彼は暫く太宰府に遊び、同船した高階真人遠成に托して、件の上奏文と將來の佛像經卷とを闕下に捧げた。

顧みれば、大同元年は悲むべき歳であつた。此の年三月十七日花東山に滿つる三春の好時に當つて、桓武天皇晏駕し給ひ、越えて五月平城天皇が御位を承け給うた。空海は太宰府の觀世音寺に居るべき官牒を得、捧げた。

て、都府樓の邊に松を撫し、月を詠め、西海に密教の弘通を圖つて居た。而して、此の間に博多に東長密寺を建てた。

彼は一歳を太宰府に送つたが、拜山の葛秋風を傳へ、一痕の明月水城を照す頃、官命が下つて、上京を命ぜられた。是に於いて、海路難波に向ひ、無事京都に著いて、新帝に謁し、密教弘通の勅命を蒙り、和泉槇尾山寺に住すべき勅命を受けた。而して、同十一月八日大和久米寺に大日經疏を講じた。時に大同二年、歳正に三十四歳であつた。

頭を回せば、既に十有五年の昔である。彼が南海東海を歴遊して、和泉に來り、勤操僧都を禮して沙彌戒を受けたのは、實に此の槇尾山の一院ではなかつたか。而して大日經の探求に南船北馬の勞を盡し、數年困苦の後、東塔大塔の下に年來の宿願を遂げたのは、實に久米寺ではなかつたか。嗚呼、歲月は循環する。歴史は繰返す。今や十有五年を隔て、幾多の



一三三  
艱難を嘗め、遠く異域に法を求め、大願満足し、更に命を奉じて、自れの受戒した舊寺を管し、一生の一大事因縁を完うした故堂に、其會て苦心慘憺の限りを盡して探求した大日經の疏を講ずるとは、運命も甚だ妙ではないか、不思議ではないか、彼が霜を踏んで鐘樓に登った路は、今も昔の昔に鎖されてをる。彼が花を摘んで御佛に捧げた久米寺の塔は、其の儘の影を今も鋪石の上に落してをる。憶へば十有五年前の一沙彌は今や一天萬乗の師と仰がれてをるではないか、垢衣破沓の一學僧は今や南北の碩德を集めて佛陀の新法音を説いてをるではないか、彼の感慨は如何であつたであらうか、槇尾山の松、久米寺の花聲を合せ、薰りを放つて、彼の榮譽を祝し、彼の盛運を喜んでをる。諺に、運命の星は爾の胸にありといふが、空海の如きは實に堅忍不拔の勉強と不撓不屈の意力を以つて、自己の運命を開拓した偉人である。嗚呼偉なる哉、空海。

否、否、榮譽の門は今開いたばかりである。活動は、此に第一步を下したばかりである。即ち同三年には課役を免せられ、四年四月嵯峨天皇位に即き給ふに及びては、皇室の優遇益加はり、同七月には命によつて、京洛の地、高雄山神護寺に移り、次いで、弘仁元年八月には河内に高貴寺を創め、同十月には神護寺に於いて、仁王經の大法を修し、更に東大寺別當に補せらるゝに至つた。斯くて、彼は灌頂職を高弟實惠に譲つたが、果隣實惠、智泉、真濟等の門下濟々として、一代の盛觀を呈した。加之九歳になる實弟の眞雅が亦彼の門に歸した。

彼の教は斯くの如くして、南都洛陽の間に漸く其の地歩を占めて來た。密教の光は舊都の六宗の上に其の光を放つに至つた。而して更に彼の布教をして容易ならしめた重要なる原因は、嵯峨天皇の優渥なる保護であつた。天皇は極力彼を庇保し給ふたばかりでなく、書に秀て、居

給うたので、殊に彼に親しみ給うた。世に嵯峨天皇、空海、橘逸勢を三筆と稱して珍重する通りに、實に右の三人は當代の名筆であつた。空海は天皇の優渥なる聖旨に感じて、時々筆墨、經卷、法帖、詩集、果物等を上つて、天機を伺ひ奉つて居た。此等の物に添へて上つた文章が今に澤山『性靈集』の中に遺つてをる。

叡山の天台と對立し、舊都の六宗を併せた空海は之を以て満足しなかつた。彼は徐々と其の宏圖を行はんとし、先づ神佛兩教の調和融合を圖つた。彼が穩かなる調和的意見を抱いて居ることは既に『三教指歸』に現れた儒道二教に對する思想に依つても分る位で、此の思想は益圓熟して、彼は密教の中に巧に神道を攝し了つた。即ち弘仁二年には宮中の齋所に於いて、自ら神道の灌頂を受け、次いで、調和的意見を發表した。兩部習合神道なるもの即ち是れてある。

神道灌頂を受くるの後、彼は乙訓寺に住し、同四年四十歳の時には、藤原冬嗣の爲に、南都に南圓堂を開き、翌年は勝道の囑に應じて日光山の碑文を撰し、更に翌弘仁六年には廣く道俗に勸めて、密部の經典を寫さしめた。此に於いて彼の教線は愈張り、彼の教化は烈風の原草を吹くが如く忽ちにして京畿を領するに至つた。殊に平城嵯峨兩天皇を始め奉り、眞如親王以下竹園槐府の人々に灌頂を授け參らせ、終に宮中に眞言院を設くるに至り、其の勢殆んど叡山の上にあつたといつても過言ではあるまい。而して此に漏すべからざるは後に高弟となつた眞濟が儒冠を脱して彼の門に入つたことである。(弘仁六年)

### 平安佛教の偉觀

春日野と嫩草山を背景にした寧樂の都の佛教は、花の匂ふが如く、關

なる春の姿である。聖武孝謙二朝の隆盛はいはざるも、東大寺大佛の造營、同戒壇建立の盛観は、説かずも、彫刻建築の技術は、其の粹を凝し、繪畫音樂の妙は、其の婉を極め、謂はゆる天平時代の全盛は、永く藝苑の憧憬するところとなり、婆羅門僧正、佛哲等に依つて傳へられた林邑龜茲の西域樂は、長へに餘韻を樂史の上に遺し、千載の下、其の美を偲ばしむるものがある。寧樂朝の佛教は、未だ醇熟せざるところがあるだけ、雄健の氣が溢れて居て、律文的である。譬へば萬葉集を繙いた時に感ずる如き一種高雅朴實の趣味が横溢してをる。而して斯る佛教も、其の末葉には物質に瀆され、俗權に混じて、漸次に其の聖なる權威を失ひ、一種の形式的な傳承的な宗教となつて了つた。

此の時に、出で、此の際に生れて、驚天動地の大業をなし、更に新しき息を吹込んだ二人の英俊がある。一は新京の北門比叡三塔に據つて一心

三觀の妙印を鼓吹した傑僧で、他は南都洛陽を收め、高野の幽邃に構へて、三密加持の大旆を翻した聖僧である。讀者諸君は問はずして、其の最澄と空海なることを知るであらう。此の二龍の對峙は、實に平安初葉の偉觀ではあるまいか。

抑、最澄は滋賀の人で、俗姓は三津首、神護景雲元年八月十八日に生れ、十二歳にして近江の國分寺に入つて出家し、大安寺行表を師と仰いだ。而して初めて最澄と稱したのは、寶龜十一年十一月十四日受度の時であつた。かくて心を佛乘に傾け、研鑽怠りなかつたが、十九歳の年大いに威發せる所あり。七月日枝に登り、山中の森林に草庵を結び、法華、金光明、般若等の諸經に心を傾けた。時に延暦四年であつた。翌五年二十歳にして、東大寺戒壇院に具足戒を受け、再び叡山の草庵に歸り、五教章、起信論、天台三大部を熱心に讀誦し、大に得る所があつたが、越えて七年、二十二

一二八  
歳の時山中の仆木を採つて自ら薬師佛を刻み草庵を比叡寺と名け更に十二年規模を擴めて一乘止觀院と號した而して十三年の秋白雲中峯に舞ふ九月の三日大供養會を嶺上に行ひ桓武天皇行幸ましまして一代の盛觀を極めた是れ即ち日本天台開宗の根柢を固めた大會であつた同十月には平安奠都となり彼の勢力は愈新都を風靡するの好運に際會した而して十六年十二月には内供奉に任ぜられ翌年十一月には南都の名僧を岳上に請じて法華十講の大法會を行ひ翌年再び之を行つた此の兩度の十講には六宗の知識悉く相會して無比の莊嚴を極めた斯くて廿三年勅許を得て入唐し天台山に遊び龍興寺に於いて道邃が止觀の講筵に列り三聚戒を受け又佛隴寺の行滿に學び更に順曉に祕密灌頂を授かり貞觀十一年の五月明州を發して六月長門に著き爾來叡岳に據つて南都の横暴を挫き腐敗を叱し顯戒論を著して宗風

を宣揚し堂々として獅子の羊中に活歩する底の概があつた斯くて根本中堂以下三塔の經營全く成り弘仁十三年六月四日五十六にして岳に寂した。

彼の行跡は略之に盡きてをる而して彼と空海との交渉は如何。空海は實に最澄より少きこと七歳であつた而して空海が五歳の時最澄は大安寺に入つた最澄が根本中堂を建てた時は實に空海は正に十五歳で京都に出て阿刀氏に就き最澄が大供養會を行つた翌年即ち平安奠都の年は空海が教海を改めて空海と命じた年に當り而して延暦二十三年には實に時を同うして二傑は共に入唐し最澄は天台山に登りて修養し翌年遣唐使の復命すると共に歸朝し空海は長安に入り青龍門下に列して其の翌年八月歸朝した而して最澄が顯戒論を著したのは空海が四十七歳の時で最澄が寂したのは空海が萬農池を經

營した翌年即ち平城上皇並に眞如親王に灌頂を授け奉った年である。斯くの如く兩雄は殆んど全く同時代に生れ、同時代に活動してをる。一方は天台、一方は眞言と區別こそあれ、共に俗權に瀆され、傳承に縛せられてゐた南都六宗を壓倒して、新信仰を鼓吹し、新氣運を醸成し、相頼り相輔けて、平安朝幾百年の人心を壟斷した。實に平安朝の宗教史は台密二教の融和混淆史である。嗚呼偉なるかな。南北の二雄。

而も兩雄の交渉は是たのみ止らなかつた。彼等互に敵視するは愚親しく相往來して、生涯更ることがなかつたのである。即ち空海は其の新宗教を宣布せんとするに先ち、大同四年の雪まだ深き如月二日叡岳に登つて偉大なる先輩を訪ひ、互に手を執つて、南都洛陽の教勢を談じ、越えて八月四日最澄は弟子經珍を遣して、祕密教の經典を借らんことを請ひ、弘仁二年四月十四日には更に書を裁して、密教を傳へんことを求

めた。而して空海も亦此の益友に對し、翌年四月同日悉曇に關する疑義を質し、互に切磋する處が少くなかつた。而して同九月十七日滿山の蜀錦霜に飽く頃、最澄は乙訓寺に空海を訪ひ、燈を擁じて、一夜歡談に耽り、同冬空海に就いて灌頂を受けた。

斯くの如く兩雄の交誼は極めて親密であつた。之を我が佛教史に徴するに前後類例を絶つてをるのである。唯鎌倉時代には法然親鸞日蓮の諸傑が東西に呼號して、殆んど同時代の觀があるが、而も實際は年代を異にしてゐる。况んや互に胸襟を開き手を執つて歡喜するをや。若し夫れ世界史上に其の例を求むるならば、李杜の親交、ゲーテ、シルレルの友情纔に其の選を同うするであらう。唐代の二詩人ワイマルの二星、其の芳を千載に傳へ、交遊の逸事は悉く藝苑の佳話として兒童も之を知らぬものはないが、我が平安の二雄に至つては之を知らざるものが多

い。豈敷すべきではないか。

鳴呼二雄は國史の誇りである。而して今はない。今は亡いが、雍々たる叡岳は緩に雲冠を戴き、翠々たる野山は靜に碧霧を披き、微笑を含んで長へに相揖讓して居るではないか。嗚呼偉なる哉。南北の二雄。

### 金剛峯寺を創す

名山に據り、靈峰を開いて、一宗の道場となすことは古來多くの高僧の常である。智顛の天台山に於ける、慧遠の廬山に於ける、皆神秀の氣の鍾まれる深山幽谷を家として、子弟を養ひ、立理を説き、冥想禪觀に耽つた。我が國に於いても、多くの偉聖が山岳を開いて、道場としたことは其の例に乏しくない。况んや、當時最澄は洛北の叡山に鎮護國家の根本中堂を建て、帝都を足下に眺め、南都の六宗を眼下に睥睨してをる。空海に

於いては、敢て、最澄に對立しようといふ考はなかつたかも知れぬが、而も天下有數の靈山を得て、一宗の基礎を据ゑたいといふ考へは必ず常に其に頭に止つて居たに相違ない。彼が明州から纜を解いて、歸朝の途に上る時に三鈷杵を密教有縁の地に止まると祈りて、空中に向つて投げたところが、遠く雲に入つて、其の中の一つが高野山に止まつたから、此に寺を起したといふ傳説の如きは、妄誕笑ふべく、一顧に値せぬ愚説である。彼は往年十九歳の歳から南海近畿を跋渉したことも、あるし、又勤操僧都の門に入つてからも、三十歳の時、大日經を久米寺に得る迄は、四方に奔走して、該經を探求してゐたから、恐らく其の頃も紀伊大和國境の深山幽谷をも跋渉したであらう。之を思へば、彼が高野に注目したのは、決して偶然ではない。必ずや、高野の幽邃が彼の心を牽いたに相違ない。

彼は洛の地神護寺にあつて、盛んに三密加持の教へを説いて居たが、弘仁七年の夏南都から大和の奥に入り、紀伊の方に回つて、詳に高野の勝を探つて歸つて來た。此に於いて、被の心は益動き、更に二三の弟子に命じて、詳に探查せしめて、愈根本道場を山上に建て、以つて、四方に呼號し、虎嘯せんと欲し、恭しく表を上つて、勅許を請うた。表に曰く、沙門空海言す、空海聞く、山高ければ則ち雲雨物を潤し、水積れば則ち魚龍産化すと、是の故に、着聞の峻嶺には、能仁の迹休まず、孤岸の奇峰には、觀世の蹤を續く、其の由る所を尋ねるに、地勢自ら爾り、又臺嶺の五寺には、禪密肩を比べ、天山の一院には、定侶袂を連ぬること、是れ則ち國の寶、月の梁なり、伏して惟るに、我が朝歴代の皇帝心を佛法に留め給ひ、金刹銀臺櫛の如く朝野に比比、談義の龍象寺毎に林をなす、法の興隆是に於いて足んぬ矣、但恨らくは、高山深嶺に四禪の客に乏し

く、幽藪窳嚴に入定の賓希れなり、實に是れ禪教未だ傳らず、佳處相應せざるの致す所なり、今禪經の説に准するに、深山の平地最も修禪に宜し、空誨少年の日好んで山水を涉覽し、吉野より南に行くこと一日、更に西に向て去ること兩日程にして、平原の幽地あり、名けて高野といふ、計るに、紀伊の國伊都の郡の南に當れり、四面高嶺にして、人蹤蹊を絶てり、今思へらく、上には國家に奉爲し、下は諸の修行者の爲に、荒藪を芟り、夷け、聊か修禪の一院を建立せんと、經中に誠あり、山河地水は悉く是れ國王の有なり、若し比丘他の許さざるものを愛用すれば、即ち盜罪を犯すといへり、加以法の興廢悉く天心に繫れり、若くは大若くは小、敢て自由ならず、望み請ふらくは、彼の空地を賜ふことを蒙りて、早に小願を遂げん、然れば則ち四時に勸念して、以て雨露の施に答へん、若し天恩允許し給はば、請ふ所司に宣布し給へ、輕しく震悚を

塵し伏して悚越を深くす。沙門空海誠惶誠恐謹言。

一三六

弘仁七年六月十九日

沙門空海上表す

果然彼が高野に憧るゝこと一日にあらざるは表に於いて明かである。彼がいかに青年時代より山紫水明の間に放浪して自然の靈氣に觸れて居たかは、空海少年の日好んで山水を涉覽し、云々の行を讀まば、思ひ半に過ぐるであらう。空海の圓滿なる人格の上には、南海、近畿、東海、山岳が渾融されて、其の微妙なる光を恣にしてをるのである。

天皇之を嘉納し給ひ、越えて七月八日紀伊の國司に宣し給ひ、同二十八日には、更に伊都那賀有田の三郡司に命じ給ひ、東は丹生川上の峰を以つて限りとし、西は應神山の谷に及び、南は當川の南の長峰を限り、北は紀伊川の南の峰を限り、伊都郡の南高野の地を賜はつた。官符に曰く、空地一處、在伊都以南深山中、曰高野、四至四方高山、東限丹生川上峰、南

限當川南長峰、西限應神山、北限紀伊川南峰、

と即ち是れをいふのである。

此に於いて、樹木を伐り、荆棘を拂ひ、路を作り、草菴を結び、金剛峯寺の基礎此に成つた。彼は翌年此の靈山に登り、四方を結界し、啓白の文を制した。文に曰く、

沙門遍照金剛敬みて、十方の諸佛、兩部の大曼荼羅海會の衆、五類の諸天、及び國中の天神地祇、並に此の山の中の地水火風空の諸鬼神等に白さく、

夫れ有形有識の者は必ず佛性を具す。佛性法性法界に遍くして不二なり。自身他身一如と與にして平等なり。之を覺る者は常に五智の臺に遊び、之に迷ふ者は毎に三界の泥に沈む。是の故に、大悲大日如來獨り三昧の妙趣に鑑み、六趣の塗炭を悲歎し給ふ。如實智の雷法界の殿



に震ひ、祕密の曼荼羅浮提に傳はる。金剛薩埵より龍猛菩薩に傳授し、師々相傳へ、今に到りて絶えず。遂に弘教和尚、辯正三藏錫を振ひ、東來して漢地に流傳し、羣生を拔濟す。然りと雖も、地泓海を隔て、人機未だ熟せず。教祕閣に韞んで未だ此の朝に及ばず。某甲幸に諸佛の加持力と、幽明機熟の力とに頼りて、去る延暦十三年を以て彼の大唐に入り、大悲胎藏及び金剛海會兩部の大曼荼羅の法、並に一百餘部の金剛を奉請して、本朝に歸りき。地に相應の地無く、時正しく是なるに非ず。日月荏苒して忽ちに一紀に過ぎたり。爰に、則ち輪主運を啓して、此の法を弘めんと擬し給ふ。必ず須く其の地を得べし。四遠を簡擇するに、此の地ト食せり。是の故に、

天皇陛下特に恩璽を下して、此の伽藍の處を賜へり。今、上は諸佛の恩を報じ、密教を弘揚し、下は五類の天威を増し、群生を救濟せんが爲に、

一に金剛乘祕密教に於て、兩部の大曼荼羅を建立せんと欲す。仰ぎ願くは、諸佛歡喜し、諸天擁護し、善神誓願して、此の事を證誠し給へ。あらゆる東西南北四維上下七里の中、一切の惡鬼神等は皆我が結界を出て去れ。あらゆる一切の善神鬼等の利益有らん者は意に隨て住せよ。又願くは、此の道場は普く五類の諸天及び地水火風空五大の諸神並に此の朝の開闢以來の皇帝皇后等の尊靈、一切の天神地祇を以て、檀主となす。

伏して乞ふ。一切の冥靈晝夜に擁護して此の願を助け果せ。敬みて白す。

次いで、壇場を建立して、結界した。(告白文略す)

斯くの如く、彼は一方に高野を經營して、大柱を造り、金堂を建て伽藍を興すと共に、他方には京洛に往來して、高雄に於いて、舊師勤操僧都の

爲に、灌頂の式を行ひ、弘仁九年春の疫病には、嵯峨天皇宸筆の般若心經を講じて、息災を祈り、大いに爲すところがあつた。

抑、高野山は紀州の北に位し、老檜山に滿ち、森鬱日光を見ざる程の幽境である。徑途廻々として躋ること五里、山嶽疊々として屏すること千萬郷、周圍の連峰は法身の花臺を表し、正平なる幽屋化佛の淨土に類してをる。惡獸毒蟲も此に赴けば、曾て害心なく、煩惱即菩提の理を現じてをる。深谷高峰も之れを經れば、險難を覺えぬので、生死即寂靜の道察すべきである。(眞雅の圖に依る)山上は東西五十町、南北三十町、窪地になつて居て、無塵池の名がある。溪水は西北に流れて、不動谷川となり、更に丹生川に合してをるので、山上の大勢は稍々凹地をなして、峰巒之れを繞り、夫れ夫れ内の八葉、外の八葉と稱せらるる。即ち内の八葉とは大塔の四方四隅を透れる峰をいふので、姑射、摩尼、楊柳、轉軸の四山、小塔、金剛、山王、遍

照の四峯聳え、外の八葉とは、壇場の外を圍む岳で、虎劍、小塔、神應、山王、今來、遍照、業等の八峯が相並んである。木立は谷間谷間を鎖し、霧は溪澗を封じ、晴れみ曇りみ、幽邃の氣人に迫るの概がある。寒氣厳しくして、芳野初瀬に櫻狩りする頃には、蓄石の如く、纒に四月の末、五月の初つかたに、綻ぶ位である。五月雨暗く、楨の葉に雫する頃は、滿山の新緑、滴らんとする中に、郭公の初聲をもらす趣、實に塵外の淨境である。古歌にも、ほととぎす、初聲よりも待るなり、高野の山の曉の空と歌はれてをる。秋は、三十六水の隈々に紅葉、燄と燃えて、孤鹿澗底に鳴き、仰げば月は白く、十六峰を照してをる。冬は積雪山を埋めて、滿目白玉臺と化する實に無比の靈場である。

空海は此の高原に密教の根據を据ゑた。彼は嘗て佛閣を興して、佛教界に君臨したのみならず、多くの神々を請じ來つて、當山の鎮護とした。

即ち、當山の地主兩所大明神、嚴島の氣比兩社、並に、自餘百二十幾柱の神祇を勸請して、山王院に祀り、堂塔伽藍の守護となし、四社大明神と崇めた。是れ、恐くは北嶺の山王權現に倣ったのであらう。

彼は既に大業を終った。彼の教義は確立し、彼の法城は落成した。此に於いてか、彼は餘生を提げて、社會事業に投じた。大悲の涙は一たび發しては池溝の開鑿となり、二たび出ては學苑の設立となつた。

高野經營に附帶して、逸すべからざる傳説がある。夫れは外でもないが、我が文化史上最重要の問題である。即ち伊呂波歌の製作是れてある。古來の傳説によれば、伊呂波歌は此の時、空海が涅槃經の四句の偈文、即ち諸行無常、是生滅法、生滅生已寂滅、爲樂を通俗の今様歌に作つて、造營に従事した木匠に歌はせたのだといふことである。是が果して動かすべからざる事實であるかどうかといふことは、未決の問題であるが、

要するに、伊呂波歌は、其の影響を後世の文化に與へたことは、非常なもので、何人も彼の恩德を被らぬものはあるまい。

### 東北巡錫と社會事業

前にも説いた通り、空海は萬事包容的であつた。譬へば、大海の洋々として、百川朝宗するも辭せざるの趣きがある。故に彼は日蓮のやうに折伏主義は採らなかつた。換言すれば、あらゆる方面に向つて、之を敵とすることは彼の主義ではなかつた。否、あらゆるものを攝取渾融するのが彼の態度である。彼は將に將たる器であつた。従つて彼れの生涯を通じて、一騎打的花々しいところは一つもないが、隊伍堂々三軍一時に動いて、山河共に震ふ底の侵し難い威風がある。要するに、彼は萬乘の器である。

願みれば、最澄は圓頓戒の事について、南都の諸宗と争ひを生じ、弘仁十年から翌年にかけて、火の手は益熾んになつて來た。最澄は大濤の唯中に巖々として聳ゆる巖の如き快男兒である。飽迄自信を執つて、敵を粉塵せずんば止まざる底の豪傑である。南都の六宗學者多しと雖も、彼は自れの信ずる天台を以て最上無比の法と信じ、自ら主張する圓頓戒の確立を圖つた。當時南都の佛教は寧樂の盛時に比すれば、衰へてゐるが、而も猶最澄を懼るゝ程には衰へてゐなかつた。此に於いて、一面に於いては教理の争ひ、他方に於いては戒の論、此の二者が南都北嶺叡山をいふの間に一大激戰を惹起す導火線となつた。然るに十一年に至つて、南都は、迷方示正論を提けて北嶺に肉薄し、最澄は顯戒論を著して、之に答へ、争論は愈頂點に達した。

南都北嶺の争論は當時の教界の大問題である。必ずや全教界を動か

さずには止まなかつた。南都は潜に空海の自黨を助けんことを望んだ。然るに、元來空海は此の問題の渦中に投ずることを好まなかつた。而も空しく京洛に止れば、何れに賛し、何れを攻むるにせよ、必ず此の渦中に捲き込まるべきは避くべからざる状態であつた。

此に於いてか、彼は機を動かすを觀た。如かず京洛の紛争を避け、名山大澤に遊び、化を偏土の人民に下さんにはと考へた。あたらしく秋風、高雄の山を染めて、溪水、紅に流るゝ頃、彼は眞濟、幹海の二人を従へて、飄然として、錫を天風に飛ばした。彼は斯くの如くにして、逢阪山の露を踏み、滋賀の湖邊を傳うて、東の方に向うた。

人或は之を以て彼の人格を云々するものがあるかも知れぬ。併しながら、當時の事情を考ふれば、彼の態度は實際止むを得ざるところであつた。即ち最澄と彼とは既に述べたやうに甚だ親密であつたし、又南都

との間も夫れに劣らず親密であつた。而して、此南都北嶺の争論は彼の立場から觀れば、全く無關係の紛争である。彼は眞言密教なる別殊の立場に居るので、彼を是とする譯にも行かねば、之を非とすべき理由もない。而も京洛に止れば、必ず情誼上全く無視する譯にも行かぬ。而して、今や高野の基礎既に固く、近畿の布教既に成功を得てをるので、偏土の民を救はうといふ考を抱くのは當然の事である。況んや、南都には、護命長慧、豐安、修圓、泰演等の有爲の龍象があつて、争論益熾を揚げんとするに於いてをや。

彼は秋風に衣の袖を拂うて、白雲青山の間に悠遊した。而も惜むらくは彼の道路は明かに傳はつてをらぬ。諸傳の記すところによれば、東海道を下つて、豆州に行き、桂谷に少時錫を留め、更に進んで、武藏野を越え、下野に出て、二荒の勝を探り、碧山の裏に宇宙の靈氣を呼吸し、二荒と

改めて日光となし、更に轉じて、奥州から出羽に遊び、到る處、名山佳水を尋ね、松風に吟じ、蘿月に嘯いた。岩代の慧日寺を創め、羽前の湯殿、羽黒、月山の三名山にも遊んだと傳へてをるが、事實は明かでない。要するに、芳を訪ね、幽を追うて、山紫水明裡の人となつたことは、疑ひなき事實である。かくて、白雪三十六峰を埋むるの頃、再び高尾の舊院に歸つたのである。

東北の教化半歳にして、密教なる新宗教は邊土に擴まる基礎を得た。彼は翌年の春を花紅柳緑の間に送つたが、綠葉薰風を送る頃、再び南海に赴くべき事が起つた。即ち郷里の百姓の請ひに依つて、池沼開鑿の任を負うて、讚岐に向うた。初め讚岐國萬農池は刑部少丞政真人濱繼等が工事を督して開鑿して居たが、工事が思はしく進捗しなかつたので、諸郡司等は之を空海に請うたのである。年の五月、空海乃ち南海に下り、督

務其の宜しきを得て、一大池を鑿つことを得た。

越えて十三年の二月には、眞言院灌頂堂を東大寺に建つる勅を蒙り、平城上皇及び其の皇子廢太子高岳親王を始めとして、幾多の縉紳に灌頂を授け上り、皇室の優遇益加つたが、此の年一世の俊傑最澄は比叡山上に寂を示したので、皇室の彼に對する歸依は愈其の厚きを致した。即ち翌年の正月には更に東寺を賜はり、教王護國寺と稱するに至り、此に灌頂院を建て、毎年春秋に灌頂を行ふの基を開いた。かくて同四月新緑山野に滿つるの頃、新帝淳利院大統を繼ぎ、また彼に依つて灌頂を受け給ひ、さらに大和の弘福寺を賜うた。斯くて明年改元あつて、天長と稱するに至つたが、此の年神泉苑に雨を祈り、三月二十日功に依つて少僧都を授けられ、辭したが許されなかつた。同六月六日には更に東寺の別當に補するの恩命を蒙り、益光榮を施したが、二年の二月花將に綻びんと

する頃、一大不幸は彼の頭上に墮ちて來た。即ち彼の高足たる智泉の芳魂が月の十四日に楊花と共に高野の奥に散つた事である。其の病篤きに及んでや、彼は懇に教誨を垂れて、愛甥の最期を慰めた。春秋正に三十

七。

智泉の死は彼に對する一大打撃であつたが、皇室の優遇は愈加はつた。即ち同月東寺の講堂造營を仰出され、始めて仁王會を修した。更に三年の正月には同會を高野山上に行ひ、同十月には桓武天皇の菩提を弔ふ爲め法華經を西寺に講じたが、同十一月には東寺の大塔の落慶式を行ひ、更に四年の五月には宮中に於いて、雨を祈り、大僧都に陞つた。而して翌年の四月には不幸にも恩師勳操僧都の遷化に遇うた。彼は先師の恩徳を追懷すること甚だ切にして、青龍寺に於いて、慧果和尚を悼んだ如く、追悼文を草して、痛たく其の知遇を謝した。而して同十二月には、彼

一五〇  
が棹尾の一大事業として特筆大書すべき一學苑を開創した。即ち綜藝種智院是れである。彼は地を左京九條に相し、方二町を限り、藤原冬嗣の助力を得て、之を完成した。當時藤原氏は勸學院を建て、在原氏は獎學院を興し、橘氏は學館院を設け、其の他和氣氏の弘文院、恒貞王の淳和院等があつて、夫れ夫れ一族の子弟を收容し、一門の繁榮を圖つて居たが、彼の綜藝種智院はさる特別の目的を有しなかつた。彼の宗義を發揚すべき俊才を養成する目的を有してゐることは固よりであるが、而も廣く一視同仁の慈心を以て、天下の高材を養はんとした。而して其の教育方針の如きも、敢て一方に偏せず、佛儒老三教の趣旨を以てし、寛容主義を採つた。今参考の爲に、其の學則を掲げてみよう。

辭にいふ。納言藤大卿左九條の宅あり、地は貳町に餘り、屋は則ち五間なり。東は施藥慈院に鄰り、西は眞言仁祠に近し。生休歸眞の原南に迫

り、衣食出内の坊北に居す。涌泉水鏡の如くにして、表裏なり。流水汎溢して左右なり。松竹風來りて琴箏の如し。梅柳雨催して錦繡の如し。春の鳥啼聲あり。鴻鴈干飛す。熱渴臨めば即ち除き、清涼慰へば即ち至る。兎には白虎の大道あり。離には朱雀の小澤あり。緇素逍遙する何んぞ必しも山林のみならんや。車馬往還して朝夕に相續く。貧道物を濟ふに意ありて、竊に三教の院を置かんことを庶幾ふ。一言響を吐けば、千金即ち應ず。永く勞契を捨て、遠く冒地を期す。給孤の金を敷くことを勞せずして、忽に勝軍の林泉を得たり。本願忽ち感じて名を樹て、綜藝種智院といひ、試に式を造り記して曰く、

若し夫れ九流六藝は代を濟ふの舟梁、十藏五明は之を利するの惟れ寶なり。故に能く三世の如來は兼學して、大覺を成じ、十分の賢聖は綜通して、遍知を證す。未だ一味にして美膳をなし、片音にして妙曲を

調ふる者はあらざるなり。身を立つるの要、國を治むの道、生死を伊陀に斷じ、涅槃を密多に證する事此を棄て、誰ぞ是を以て、前來の聖帝賢臣寺を建て、院を置き、之を仰て道を弘む。然りと雖も毗訶の方袍は偏に佛經を翫び、槐序の茂廉は空しく外書に耽る。三數の策、五明の簡の若きに至りては、壅泥して通ぜず、肆に綜藝種智院を建て、普く三教を藏め、諸の能者を招く。冀ふ所は三曜炳著にして、昏夜を迷衢に照し、五乘鑣を並べて群庶を覺苑に驅らん。或人難じて曰く、然れども、猶事先覺に漏れて、終に未だ其の美を見ず、何となれば備僕射の二教、石納言の荒亭是の如き等の院並に皆始有りて終無く、人去りて跡穢れたり。答ふ、物の興度は必ず人に由る。人の昇沈は定めて道にあり。大海は衆流に資りて以て深きを致し、蘇迷は衆山に越えて以て高きを成す。大厦は群材の支持する所、元首は股肱の扶保する所なり。然れば則

ち數多き者は竭き難く、偶寡き者は傾き易し。自然の理然らしむるなり。今願ふ所は、一人恩を降し、三公力を勦せて、諸氏の英貴、諸宗の大徳、我と志を同うせば、百世繼ぐことを成さん。難者の曰く、善いかなと。或は人有りて、難じて曰く、國家廣く庠序を開いて、諸藝を勸勵す。霹靂の下蚊響何の益かあらん。答ふ、大唐の城には坊々閭塾を置きて、童稚を教へ、縣々に卿學を開きて、廣く青矜を導く。是の故に才子城に滿ち、藝士國に盈てり。今是の華城には、但一の大學あるのみにて、閭塾あることなし。是の故に貧賤の子弟津を問ふ所なく、遠方の好事往還するに疲れ多し。今此の一院を建て、普く童蒙を濟はん。亦善からずや。難者の曰く、若し能く果して此の如くならば、美を盡し、善を盡せり。兩曜と明を争ひ、二儀と久しきを競はん。國を益するの勝計、人を利するの資州なり。余不敏なりと雖も、一簣を九仞に投げ、涓塵を八埏に添へて、四



恩の廣徳を報じ、三點の良因と爲さん。

一五四

師を招く章

語に曰く、里仁爲美、擇不處仁、焉得智と。又曰く、遊於六藝と。經に曰く、初め阿闍梨、衆藝を兼ね綜ぶと。論に曰く、菩薩菩提を成ぜんが爲に先づ五明の處に於いて法を求むと。是の故に善財童子は百十城を巡りて、五十の師を尋ね、常啼菩薩は常に市に哭して切に深法を求む。然れば則ち智を得ることは仁者の處にあり、覺を成じ五明の法に資し、法を求むることは必ず、衆師の中に於いてし、學を學ぶことは當に衣食の資に在るべし。四者備りて、後に功あり。是の故に、此の四縁を設けて、群生を利濟す。處有り法有りといふと雖も、若し師無くんば解を得るに由無し。故に先づ師を請ず。師に二種あり。一には道、二には俗。道は佛經を傳ふる所以、俗は外書を弘むる所以なり。真俗不離とは我が師の雅

言なり。

一 道人傳受の事

右顯密二教は僧の意樂なり、兼て外書に通ぜんことは住俗の士に任す可し。意樂ありて内の經論を學ぶ者あらば、法師心に四量四攝に住して、勞倦を辭せざれ。貴賤を看ること莫くして、宜しきに隨ひて指授せよ。

一 俗の博士教授の事

右九經九流三立三史七略七代、若くは文、若くは筆等の書中に若くは音、若くは訓、或は句讀、或は通義一部一帙童蒙を發くに堪へたらん者は住す可し。若し道人意に外典を願はん者は、茂士孝廉宜しきに隨ひて傳授せよ。若し青衿黃口の文書を志學

一五五

することあらば、縫張先生心慈悲に住し、思ひ忠孝を存して、貴賤を論せず、貧富を看ずして、宜しきに随ひて人を誨へて倦まざれ、三界は吾が子なり」とは大覺の獅子吼、四海は兄弟なり」とは將聖の美談なり、仰がずんばあるべからず。

一 師資糧食の事

夫れ「人懸瓠にあらず」とは孔丘の格言なり、「皆依食住」とは釋尊の所談なり、然れば則ち其の道を弘めんと欲せば、必ず須く其の人に飯す可し、若くは道若くは俗、或は師、或は資、心學道にあらん者並に皆須く給すべし、然りと雖も道人素より清貧を事とす、未だ資費を辨せず、且らく若干の物を入る、若し國を益し、人を利するに意あり、迷を出て、覺を證せんことを志求せん者は同じく涓塵を捨て、此の願ひを相濟へ、生々世々同じく佛

乘に駕して共に群生を利せん。

天長五年十二月十五日

大僧正空海記

高野の入滅

京洛の教化正に隆盛の極に達し、萬農池の開鑿、種智院の創立既に成り、彼が五十餘年の奮闘は此に花を著け、實を結んだ、彼は、最早其の爲すべきをなし、施すべきを施した。

天長六年には南都大安寺の別當に補せられ、同七年朝廷各宗に勅して其宗要を上らしめ給うた時には、彼は十住心論十卷を著し、一代佛敎に判釋を加へ、密敎を以て其の極致なりと宣言し、更に要を提げて、秘藏寶鑰三卷を撰んで、闕下に捧げた、而して其時法相宗の護命は研神章五卷を、天台宗の義真は義集一卷を、律宗の豊安は戒律傳來記三卷を、三論

宗の玄叡は大義抄四卷を、華嚴宗の普機は一乘開心論六卷を上った。此に於いてか、空海の光榮ある最後の事業は終った。翌年病に依り、上表して大僧都を辭したが許されなかつた。時に天長八年正に五十九歳であつた。翌年高野山に萬燈會を修して衆生の迷闇を照すに擬した。

想へば、波あり山ある五十九年の生涯、彼は今や人生の旅路の終りに達したのである。彼が十有九歳にして、蹶然として佛陀の門を叩いてから、四十餘年の光陰は夢の如く西に流れて了つたのである。併しながら、彼は其の全生涯を顧みて後悔の涙を浮ぶることを要しなかつた。否彼の生涯は實に光榮ある生涯であつた。生き甲斐ある生涯であつた。三十歳にして大日經を久米寺に得、翌年鵬翼萬里大唐に入り、長安に遊んで、一代の英傑慧果和尚の提撕の下に密教の傳法を受け、歸來、朝に野に三密加持の新法音を傳へて、草樹俱に靡くの概があつた。嗚呼偉大なる哉、

人格の力吾人は彼の生涯を回想して轉た莊嚴の念に動されざるを得ない。彼は實に一代の獅子兒である。一世の燈炬である。而して此の大火燈も澎湃として寄せ來るタイムの潮には敵しかねて、今や靜に永劫の懷に歸らんとしてをる。吾人西天の落日を望んで其の光輝ある最終を讚するが如く、今や此の偉人の終焉に臨んで湧きては渦き流れては溢るゝ宇宙の大法の嚴として侵すべからざるをみて、肅然として其の大威嚴の前にぬかづかざるを得ない。嗚呼偉なる哉宇宙の巨律嗚呼美しい哉。人生最後の努力に輝きつゝ頓ては歴史の裏に沈みゆくべき人格の輝き！滅落の門に迫れる人生の威嚴！

彼は入滅の期愈迫るを感じ、承和元年三月弟子を戒め、同五月二十八日遺誠文を定め、越えて十一月十五日には諸弟子を集めて、懇懇懇切なる最後の訓戒を施し、其の他附法傳燈の事、法苑修法の事、悉く終へて、京

洛を去り、彼が人生最終の呼吸を收めんとする墳墓の地、高野の奥に入  
った。

高野の奥！

嗚呼何たる幽邃の境ぞ、内の八葉は翠色を含んで雲洞を封し、外の八  
葉は碧樹を擁じて、遠く人寰を隔つ、白雲は悠々として岫を出て、溪水は  
潺湲として夢を誘ふ、十六峰の間、三十六水の上、大高原の奥、松蘿薈々  
として草の菴を鎖し、萬籟闕として孤燈獨り醒むるの時、彼は最後の定  
に住し、水の如き天門の曉に寂然として印を結び、三昧の境に入った。嗚  
呼、金剛の十指一たび合しては、假令宇宙の權威を以てするも、之を復す  
ことは出来ぬ、生死を超脱し、時空を截斷して、唯見る寂靜の涅槃海、聲心  
兩つながら滅して、雲水俱に了々、彼は逝いたのである、時に承和二年三  
月二十一日、三寶鳥の聲幽に寂寞を破って、胸に沁む時であつた、人間に

あること正に六十二年。

嗚呼千古の偉人は逝いた、逝いたといふ語は彼の莊嚴なる人格に對  
して餘りに弱い、彼は眼を閉ぢた巖洞の獅子は眠りに就いた、嗚呼偉い  
なる哉、人格の力傳へいふ、五十六億七千萬年龍華三會の曉まで、彼は此  
處に眠つてをるのであると、誠に然り、夫れ一二三は人間の少數である、  
千萬億は人界の大數である、而も極大と極小、億一を渾融して、此處に默  
寂の境に逍遙せるもの、彼や死せるに非ず、活けるにあらず、生死共に粉  
碎して、高野の奥に黙してをるのである、誰か宇宙を大なりといふ、誰か  
碧落を高しと謂ふ、黄金に迷ひ、運命に泣ける人の子よ、汝の眼を舉げて、  
此處に眠れる巨獅子の相を觀よ。

佛教精神の體現と大師の人格

佛○教○の○精○神○を○知○ら○ん○と○欲○す○る○者○は○佛○教○興○起○時○代○に○於○け○る○印○度○の○社○  
會○狀○態○を○知○ら○ね○ば○な○ら○ぬ○。凡○そ○思○想○界○に○あ○れ○、物○質○界○に○あ○れ○、一○事○一○物○の○  
起○る○に○は○、必○ず○其○の○起○ら○ざ○る○べ○か○ら○ざ○る○因○由○が○あ○る○。若○し○世○に○起○る○べ○き○  
原○因○が○な○か○つ○た○な○ら○ば○、唯○一○莖○の○か○弱○き○日○陰○草○で○も○生○え○さ○せ○る○こ○と○は○  
出○來○ぬ○し、河○瀬○に○沈○め○る○さ○ゞ○れ○石○さ○へ○動○か○す○こ○と○は○出○來○ぬ○。况○ん○や○幾○千○  
載○に○亘○り、幾○十○國○に○及○ぶ○宗○教○に○於○い○て○を○や○。

印○度○ア○ー○ル○ヤ○人○種○が○嬌○水○の○邊○り○か○ら○信○度○河○の○支○流○五○河○に○侵○入○し○た○  
頃○の○平○和○な○美○し○い○自○然○崇○拜○の○讚○頌○は○、梨○俱○集○錄○十○卷○と○し○て○、今○に○遺○つ○て○  
居○る○。此○の○時○代○に○於○け○る○彼○等○の○生○活○は○極○め○て○、單○純○で○あ○つ○た○。牛○羊○を○牧○し、  
雨○神○を○拜○し○て○豐○饒○を○祈○り、蘇○摩○を○灑○い○て○、部○落○の○繁○榮○を○願○ふ○に○過○ぎ○な○か○  
つ○た○。而○も○一○た○び○罽○を○恒○河○の○溪○谷○に○轉○じ○て○、中○印○度○に○入○る○や、婆○羅○門○(僧○侶○)  
は○漸○次○に○勢○力○を○得○て○、其○の○他○の○部○族○を○壓○服○し、階○段○制○度○此○に○生○じ○て○刹○利○、

吠○奢○戍○陀○羅○武○士○、商○賈○、農○民○は○益○屈○辱○に○陥○り、宗○教○も○虛○儀○虛○式○に○流○れ、多○大○  
の○犧○牲○、巨○額○の○黃○金○が○な○け○れ○ば○、梵○の○大○神○の○惠○み○に○與○る○こ○と○が○出○來○な○く○  
な○り、古○は○人○々○直○に○爐○邊○に○於○い○て○神○を○祭○る○こ○と○が○出○來○た○が○今○や○宗○教○の○  
鍵○は○一○に○婆○羅○門○の○手○に○歸○し、彼○等○の○媒○介○に○依○ら○ざ○れ○ば○神○を○祈○る○こ○と○す○  
ら○出○來○な○く○な○つ○た○。加○之○婆○羅○門○は○自○族○の○權○威○を○擁○護○し、自○家○の○繁○榮○を○圖○  
る○が○爲○に○神○書○に○加○ふ○る○に○牽○強○な○る○註○釋○を○以○つ○て○し、附○會○塗○抹○以○て○他○の○  
三○族○を○虐○げ、遂○に○戍○陀○羅○の○如○き○は○全○く○宗○教○上○の○恩○惠○に○與○る○の○路○を○斷○た○  
れ○た○。此○に○於○い○て○か○、梵○の○可○憐○な○る○赤○兒○は○今○や○其○父○に○往○く○の○道○を○失○つ○た○  
の○で○あ○る○。

勿○論○斯○る○思○想○上○の○束○縛○に○堪○へ○ず○し○て○、自○由○を○絶○叫○す○る○幾○多○の○學○徒○を○  
生○じ、婆○羅○門○の○手○を○借○ら○ず○し○て○、自○ら○天○地○宇○宙○の○祕○奧○を○叩○き、唯○一○絶○對○の○  
大○梵○に○歸○入○せ○ん○こ○と○を○求○め○た○も○の○多○か○つ○た○が、而○も○大○多○數○の○生○靈○に○

慰安を與ふることは出来なかつた。而して更に他方を顧みれば、現世に絶望した徒は盛に快樂主義、本能主義を唱へて、地上の驩樂に耽らんことを勧めた。此に於いてか、生靈は頼るところを失ひ、進んで彼に往く可きか、退いて之に投すべきか、疑惑の雲は益深く、今や大雪山の影長へに迷惑の霧に隠れ、恒河の水不安の雨に濁つて、精神上の苦悶、社會上の懊惱共に究極に達し、天地兩つながら幽暗の色に沈んで、暴風之を吹き、豪雨之を洗ふにあらずんば、再び天日を仰ぐこと能はざる状態となつた。婆羅門の横暴、教權の跋扈、物心兩界に於ける生靈の苦惱は、西紀前五世紀頃に至つて、其の頂點に達した。今や嚴然たる古典の權威は益加つたが、而も脉々として流るる新思潮は、未だ此の鐵鎖を切斷し、新生命の歡びを與ふるには弱きに過ぎた。此の時に當つて、幾萬の生靈は悉く天の一方を仰いで、雲雨の到らんことを翹望した。而して觀よ、此の新時代

的苦悶の饑に向つて、沛然たる甘露の雨を濺ぐものが起つた。他なし。我が人天の師、三界の雄、人生の慰安者たる佛陀、其の人であつた。佛陀は新時代の煩悶に向つて、明快なる解決を與へた。彼は梵天を否認し、教權を排斥し、社會上に於ける平等主義と、道德上に於ける自律主義とを以つて、生靈の心肉兩面に亘つて、痛快なる外科術を施した。即ち四民平等の新法音と、心意を淨うして、宇宙の眞理を體得し、道德の根源に徹する道行として、簡易適切なる八正道を説いた。八正道とは、正信、正しい信仰、正しい思想、正しい語、正しい言語、正業、正しい行ひ、正命、正しい生活、正精進、正しい勉強、正念、正しい念慮、正定、正しい觀念の八つで、畢竟此れ精神を淨くし、正しくする方法である。彼は何等の六かしい哲學を説かなかつた。何等の高い理論を説かなかつた。而して、當時行はれてゐた肉體を苦めて、死後天に生れ、快樂を享けんと希ふ苦行派の嚴肅主

一六六  
義と肉に溺れ酒に耽る快樂派の本能主義と共に之を否定して非苦非樂の中道を以つて解脱修行の方針とした是に於いてか賢愚老幼俱に彼の教に赴くこと河水の海に注ぐが如く向日葵の太陽に向ふが如く忽ち五印度を風靡し幾萬の信者を得た是れ固より彼の偉大なる人格が然らしめたのであるが而も其の教へが當代の苦悶を排除し疑惑を拂ふに適切であつたからである換言すれば佛陀は一面平等の新法音を説いて人格の尊嚴を教へ教權より精神を解放し更に八正道の易道を示し涅槃の門を開いて當時未解決の人生に解決を與へたのである涅槃とは敢て六かしい概念ではないあらゆる束縛や煩惱からの個人の解放であり解脱であり精神の獨立である吾人の精神があらゆる慾望や外物に累されずして常に彼れ等を服従せしめ使用するを得る自由なる位置にある状態を指して稱した名稱に過ぎぬ佛陀は實に靈と

肉と併せ救うた救世主である凡そ宗教が人生に對して偉大なる力を有するには、人生の實相に觸れて居なければならぬ徒に高遠なる神佛を説き空漠なる概念を翫んだ所で何の役に立たう一種の遊戯に過ぎぬのである人生は眞面目である現實は動かす可からざる實在である而して人は此の間に苦み此の間に迷うてをる以上は實社會に觸れず現實に解決を與へ得ぬ宗教が何にならう社會の現實と社會の理想とに没交渉な宗教は閑人の玩具である寺院の裝飾物である無用の長物である諸の悪はなすことなかれ諸の善を奉じ行ひ自ら心を淨うせよとは佛教の精神である佛教は靈肉共に濟ふを以て目的としてをる佛教の開祖たる佛陀が此の大精神を體現した聖人であつたばかりでなく我が空海も實に此の精神を最も能く發揮した偉人である空海の偉なるところは外にも澤山あるが而も吾人が彼を特に大なりとするは

此の理由に基くこと最も多きを断言する。

彼は實に伊呂波を製作した。繪畫彫刻文學書道共に優秀なる手腕を有し、我が文化史上に多大の貢献を捧げた。其の功績は誠に偉大である。而も彼には更に尊ぶべき大いなる點がある。即ち彼が靈と肉との不離を認めて、眞の教化は靈肉併せ濟ふにあることを自覺してゐた。大見識である。是彼が平凡なる幾多の圓顛の上に活步する所以である。彼は綜藝種智院式に於いて、其の道を弘めんと欲せば、必ず其の人に飯す可しと喝破した。是れ彼の眼炬の如く、人生の真相に徹し、宗教の奥旨を看得した。金言である。彼は此の趣旨よりして、萬農池を鑿き、種智院を建てた。斯くの如くにして、彼は三十餘年の間、南船北馬、幾多生靈の心肉を併せ牧したのである。嗚呼、偉なる哉、空海。

\* \* \* \* \*

延喜二十一年醍醐天皇其の功を追懷し給ひ、弘法大師の證號を賜うた。吾人は此の光榮を記して、偉人の傳記を終らんとするに當り、現代の澎湃たる社會的精神的懷疑の思潮に對して、彼の人格を懷ふこと轉た切である。



昭和九年六月十二日 第三版印刷  
昭和九年六月十五日 第三版發行

【弘法大師言行錄】

偉人研究



定價三拾錢

著者	大屋徳城
發行者	東京市神田區須田町一丁目 神谷文治
印刷者	東京市小石川區同心町一番地 戸倉松之助
印刷所	東京市小石川區同心町一番地 武山堂印刷所

東京市神田區須田町一丁目拾番地

大京堂出版部

振替東京三五四〇五番電話神田四一四九番

發行所

# 偉人研究

百島	田中	大屋	室田	松本	藤吉	渡邊	本田	渡邊	五十嵐	秋山	渡邊
操編	豐松編	徳城編	有編	尙編	喜一編	修二郎編	無外編	修二郎編	越郎編	悟庵編	修二郎編
ゴ	ペ	日	ウ	ネ	ナ	新	熊	渡	吉	聖	大
ッ	ス	蓮	エ	ル	ポ	井	澤	邊	田	徳	石
ル	スタ	上	リ	ソ	レ	白	蕃	華	松	太	良
ド	ロッ	人	ン	ン	オ	石	山	山	陰	子	雄
ン	チ	行	ン	ン	ン	行	山	山	行	行	行
言	言	行	言	言	言	行	行	行	行	行	行
行	行	録	行	行	行	録	録	録	録	録	録
録	録	録	録	録	録	録	録	録	録	録	録
郵	郵	郵	郵	郵	郵	郵	郵	郵	郵	郵	郵
定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定
價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價
金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

部版出堂京大 目丁一町田須區田神市京東 兌發 番五〇四五三京東座口替振

# 偉人研究

松本	秋山	中里	渡邊	百島	吉川	中里	畔上	中里	中里	中里	畔上	中里	中里	畔上
尙編	悟庵編	介山編	修二郎編	操編	潤二郎編	介山編	賢造編	介山編	介山編	介山編	賢造編	介山編	介山編	賢造編
ル	貝	中	山	ワ	ロ	二	グ	フ	ガ	ト	リ	ト	リ	コ
ー	原	江	鹿	シ	ーズ	宮	ラ	ラン	ー	ル	ン	ル	ン	ー
テ	益	藤	素	ン	ズ	尊	ッド	ク	フ	ス	コ	ス	ー	ン
ル	軒	樹	行	ト	ヴェ	徳	スト	リ	ァ	ト	ー	ト	ン	ン
言	言	言	言	言	ル	言	ン	ン	ール	イ	言	イ	言	言
行	行	行	行	行	ト	行	言	言	ド	言	行	言	行	行
録	録	録	録	録	ト	録	行	行	ド	録	行	行	録	録
郵	郵	郵	郵	郵	郵	郵	郵	郵	郵	郵	郵	郵	郵	郵
定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定
價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價
金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

部版出堂京大 目丁一町田須區田神市京東 兌發 番五〇四五三京東座口替振

# 偉人研究

渡邊芳雄編	佐久間原編	田中豊松編	大屋徳城編	勝水瓊泉編	杉原三省編	秋山悟庵編	丸島敬編	松本尅編	廣瀬勘次郎編	松原至文編	本田無外編
ラスキン	シェークスピア	シエーザ	傳教大師	大塩平八郎	高野長英	上杉鷹山	本居宣長	マホメット	ガリバルヂ	西郷隆盛	法然上人
言行録	言行録	言行録	言行録	言行録	言行録	言行録	言行録	言行録	言行録	言行録	言行録
郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢

大京堂出版部 發兌 東京市神田區須田一丁目五番

# 偉人研究

北畠竹之助編	村田犀川編	秋山悟庵編	廣瀬勘次郎編	渡邊修二郎編	大屋徳城編	松原至文編	西脇玉峰編	河面仙四郎編	本田無外編	榎不二夫編	姊齒準平編
司馬温公	佐久間象山	林子平	フレール	徳川光圀	弘法大師	親鸞聖人	諸葛孔明	クロムウェル	道元禪師	伊藤仁齋	リヴウキングストン
言行録	言行録	言行録	言行録	言行録	言行録	言行録	言行録	言行録	言行録	言行録	言行録
郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢

大京堂出版部 發兌 東京市神田區須田一丁目五番

# 偉人研究

吉川潤二郎編	渡邊修二郎編	西川光次郎編	高橋五郎編	澤田順次郎編	西川光次郎編	渡邊修二郎編	中島筑水編	服部俊崖編	森近運平編	井口丑二編	横山雄偉編
チャールス十二世言行録	木戸孝允言行録	ブーリス大將言行録	エマールソン言行録	ダーウキン言行録	トローパー言行録	高田屋嘉兵衛言行録	菅原道真言行録	白隠和尚言行録	ジョン・ハワード言行録	豊臣秀吉言行録	セシルローズ言行録
郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢

東京堂出版部 發兌 東京市神田區須田一丁目番五〇

# 偉人研究

高橋淡水編	杉原三省編	大橋長一郎編	渡邊芳雄編	渡邊修二郎編	永代靜雄編	高橋淡水編	本田無外編	田中豊松編	丸島敬編	吉川潤二郎編	武安衛編
賴山陽言行録	藤田東湖言行録	山崎闇齋言行録	王陽明言行録	大久保利通言行録	新島襄言行録	福澤諭吉言行録	白河樂翁言行録	エヂソン言行録	平田篤胤言行録	ビスマルク言行録	孟子言行録
郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢	郵定税金四拾錢

東京堂出版部 發兌 東京市神田區須田一丁目番五〇

# 偉人研究

尾池宜卿編	竹村脩編	下中芳岳編	渡邊修二郎編	西脇玉峯編	西川光次郎編	秋山悟庵編	福島成行編
文	モ	埴	坂	伊	ガ	伊	乃
天	ル	保	本	能	ム	藤	木
祥	ト	己	龍	忠	ベ	博文	希
言行錄	言行錄	言行錄	言行錄	言行錄	言行錄	言行錄	言行錄
定價金 參拾錢	定價金 參拾錢	定價金 參拾錢	定價金 參拾錢	定價金 參拾錢	定價金 參拾錢	定價金 參拾錢	定價金 參拾錢

發行元

東京・神田・昌平橋際

偉人言行錄刊行會

發兌 東京市神田區須田町一丁目 大京堂出版部

終

偉人言行錄發行會發行